幼兒の教育

第三十一卷　三月號　第三號

東京女子高等師範學校內
日本幼稚園協會

【最新刊】

奈良女高師教授
附屬幼稚園主事 森川正雄先生著

幼稚園の經營

▲四六判四百頁 ▲定價二圓八十錢
▲寫眞挿繪入美本 ▲送料十八錢

▲實際的保育方法を解說した新書
▲現代幼稚園經營の模範的指導書
▲保姆一人に必ず一冊必須の名著

保育上の實際問題は訓練要目保育要目を初め總てを詳述解決さる。日本の實際的保育方法を究明詳述し更に歐米の新研究を配し完璧とす。幼稚園及託兒所の實際的保育指針として保姆の必携すべき權威書。

【內容目次】

第一章 幼稚園經營概論
第二章 幼兒の眞生活＝幼兒の心身に付徹底的に闡明さる。
第三章 保育の眞髓＝保育方法に付實際的に指示さる
第四章 家庭との連絡
第五章 躾け方要目（訓練要目）と其解說＝自由主義と要目主義との統合をなし實際方法を示さる。
第六章 保育要目と其解說
第七章 米國公立幼稚園に於ける最近要目の實例 1デンバー市公立幼稚園要目と其の批判 2ヒル女史幼稚園要目の批判
第八章 幼稚園の標準施設
第九章 幼稚園時間配當法＝小學校時間割に似たることの是非と其方案。
第一〇章 幼稚園に關する諸規定
第一一章 保育上の難問題と其解決
第一二章 託兒所の經營＝近時發達の託兒所經營につき詳述さる。

十二版 奈良女高師教授 附屬幼稚園主事 森川正雄先生著
幼稚園の理論及實際
定價三・〇〇 送料〇・一六

三版 奈良女高師教授 附屬幼稚園主事 森川正雄先生著
託兒所育兒法
定價二・〇〇 送料〇・一六

五版 奈良女高師教授 附屬幼稚園主事 森川正雄先生著
保姆用教育學
定價二・八〇 送料〇・一六

五版 大阪家なき幼稚園長 大阪毎日新聞社顧問 橋詰良一先生著
家なき幼稚園の主張と實際
定價二・五〇 送料〇・一六

東京 東大 東洋圖書株式合資會社 發兌

東京市神田區鍋町三丁目九番地・振替東京一〇三七番
大阪市南區內安堂寺町一丁目二八番地・振替大阪三九五五六番

内親王殿下の御誕生を御祝ひ申上げます

日本幼稚園協會

幼兒の教育　日本幼稚園協會編輯

會長　東京女子高等師範學校長　吉岡郷甫

主幹　東京女子高等師範學校教授　附屬幼稚園主事　倉橋惣三

日本幼稚園協會規則

第一條　本會ハ幼兒教育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第二條　本會ハ日本幼稚園協會ト稱ス

第三條　會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒教育ニ篤志ナルモノトス

第四條　會員ハ會費トシテ一ケ月金參拾五錢ヲ醵出スヘシ

第五條　令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ稗益アリト認ムルトキハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ

第六條　幼稚園ニ關係アルモノニシテ本會ノ事業ノ爲ニ特ニ盡力ヲ與ヘラルヽモノニ請ヒテ地方委員トナスコトアルベシ

第七條　本會ハ毎年一回總會ヲ開ク。但場合ニヨリ臨時休會スルコトヲ得

第八條　本會ハ左ノ事業ヲ行フ

一、幼兒教育ニ關スル研究及ビ調査

一、幼兒教育ニ關スル講演會及ビ講習會ノ開催

一、雜誌發行（毎月一回）

一、幼兒教育ニ關スル圖書刊行

一、保姆就職及招聘ニ關スル仲介

一、其他本會ノ目的ニ稗益アリト認メタル事件

第九條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長　一名　會務ヲ總理ス

主幹　一名　會長ヲ補佐シテ會務ヲ掌理ス

幹事　若干名　會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス

評議員　若干名　重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ズ

第十條　會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス

第十一條　主幹　幹事　評議員ハ二ケ年ヲ期シテ會長ヨリ推舉スルモノトス

第十二條　本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ルヽトアルヘシ

第十三條　本規則ハ總會出席會員ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラザレハ變更スルヿヲ得ズ

第三十一卷　幼兒の教育　第三號

——（目　次）——

口繪……ぬひとり
巻頭言……温……倉橋惣三（一）
フロエベル　エテュケーショナルイン　ステテュート……宇佐美ケイ（二）
入學檢定の結果……堀七藏（九）
幼稚園の人としての醫學博士竹村一氏……膳眞規子（二三）
幼稚園衛生の特色……竹村一（二五）
幼兒の喜び歌ふ歌（四）……葛原しげる（二七）
幼な心へのお話について……大塚喜一（三三）
玉成幼稚園參觀の記……氏原鋹（三八）
保姆の顏……坂内ミツ（四三）
幼稚園の園藝として栽培し易き「マガレット」に就て……膳眞規子（四四）
ぬひとり……新庄よし子（四七）
早春の庭めぐり……及川ふみ（五三）
三月の手技材……和田實（五四）
幸吉の旅……岡田美津（五六）
歐米に於ける學校給食の現狀（承前）……原徹一（六六）

生徒募集

●募集人員　六十名（來る四月入所せしむ可きもの）

●出願期日　來る三月末日迄

規則書は貳錢を同封して申込まれたし

目白幼稚園保姆養成所

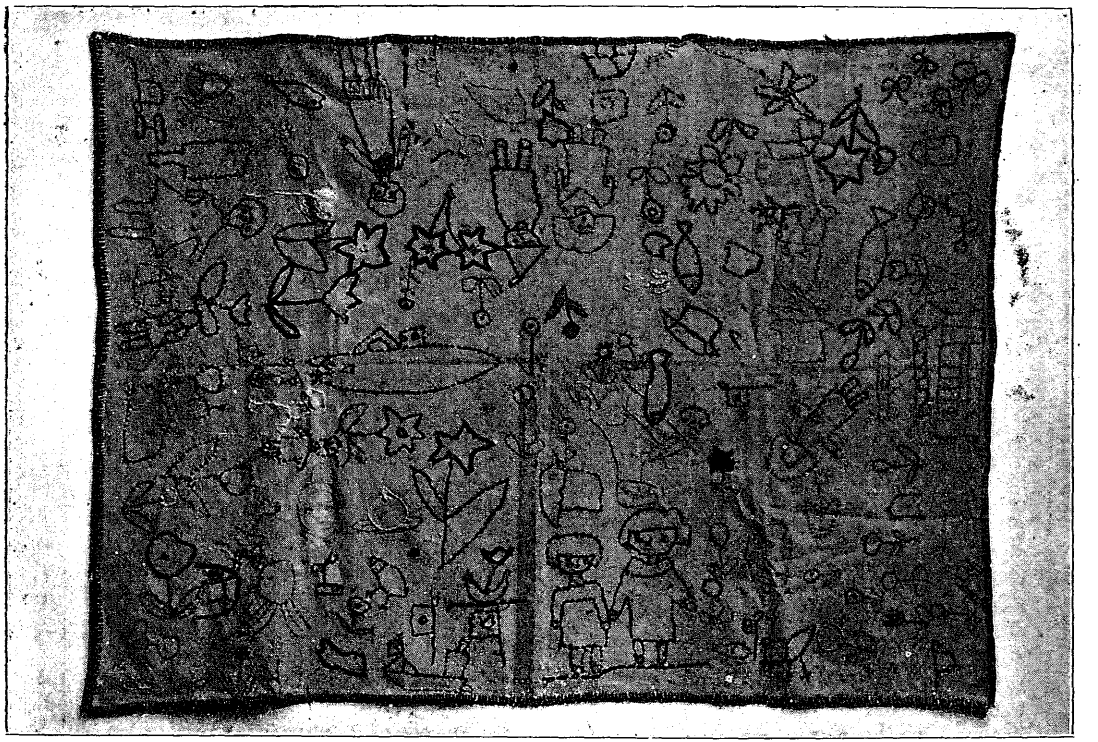
所長　和田實

東京府豐多摩郡落合町下落合一三八八番地

省線目白驛下車八丁目白文化村入口

西武線中井驛下東北方丘上（五丁

武藏野線推名町下車東南方（四丁



ぬひとり　（一）　　（記事參照）

第五十九圖 (二) (三)

幼兒の教育

昭和六年三月

溫

溫の一字、保育の意義を盡すといふも過言であるまい。

凝つたものを解き、閉ぢたものを開き、縮んだものを伸ばし、萎びたものを張り、一切の生命を進展させる。

見よ、今、この普き溫の力を。萬物、そこに笑ひ、こゝに躍り、自らの力を樂しむ。

溫は下から湧き、上から漲る、皆自然である。野に園に溢るゝ自然である。つくりもの、こしらへものゝ溫は、その眞の力を持たない。溫室の溫は、到底自然の溫ではない。

溫の人、保育者、春は正に、あなたの、やさしくて強いはたらきを其のまゝに示してゐる。

（倉橋惣三）

フロエベル、エデュケーショナル インステテユート

宇佐美ケイ

デモンストレーション男女小學校と幼稚園

この學校は前に記した、フロエベル インステテユート、トウレーニング カレッヂと同じ系統の學校であり其の學生の實地練習をする學校であつて、幼稚園、小學校の教育研究の中心とされてゐる。幼稚園として研究的である點に於て、渡歐以來初めて出會つたものとして特に興味多く感じた一つである。

幼兒は滿三歳から四歳までを幼稚園兒とし、四歳から六歳を中間級としてある點は先きに紹介した二三の幼稚園と同樣である。今其の要目を摘記すると

幼稚園

自然研究（動物の飼育、植物の栽培）

感覺及び言語の練習。

遊戯、唱歌、律動遊戯。

手技。

中間級

自然研究

談話、（文學、歷史、地理の初步としての）

遊戲、唱歌、律動遊戲。

讀方、書方、數と數字。

手技。

幼稚園も中間級も極めて自由で、時間割等も單にお話、唱歌、手技、遊戲、とわけてあつても必しも何時から何時までといふ事にせぬといつて居られた。

朝九時廿分に始まり幼稚園は十二時、中間級は十二時卅分に終る。（英國のお昼は午後一時か一時半を普通とする）

子供が活氣があり實によく集注して各自の仕事を靜かにしてゐる。中間級が著中休日前の一つの大きい合同作業を今日終る所で、或兒童はまだ非常にいそがしくしてゐる。仕事の終つた子供は如何にも大人が自分の製作を觀賞する態度で數人その前に坐して切りに何か話をしてゐる。大體を記錄する事にする。

二つの部屋が續いゐて、大きい方の部屋の床の中央に汽車のレール（既製玩具）が置いてある、可なり大きいもので線路は其處から縱横に立つてゐる、ゼンマイ仕掛の汽車がその上を走る。トンネル、踏み切り、田舍の停車場、これらも皆既製玩具である。二三の男兒が切りに汽車を走らせてゐる。三方の壁

に添ふて、海岸、村落、森林、工場、牧場がある。壁にはそれ〳〵の遠景がゑがゝれた紙が張り廻してある。それには雜誌のゑのきりぬき、或は子供の描いた人物、畫などのきりぬきがはつてある。海岸は可なり大きい砂箱が置いてあつて、其處に厚紙でこしらへた小さな家が並んでおいてあり、海岸の砂をしき、小さい介殼が散つてゐる。遠景は海原に續くところ、帆掛船や軍艦、汽船がきりぬいてはつてある。森林は鉢植を並べてある、綠の色紙で鉢をかくしてある所など子供らしい苦心が見えて嬉しい。遠景はやはり遠く森が續く。一人の女兒が水やりをしてゐた。村落には厚紙製のいくつかのコッテージが所々置いてある。鷄小屋、牛舍がある。古いボール箱など利用してある。既製玩具も其中に加へてあるが如何にも調和よく配置してゐる。子供の工夫したもので面白いと思つた一つ二つ。

マッチの空箱を三つ位縱にならべ、その上に∨形の畫洋紙の屋根を置きその上に麥稈を適當の長さに切つてはりつけたのなど實によく出來てゐる。或は瓶詰の箱などから出て來る切り口の浪形になつたやうなボール紙を適當な大きさにきつて屋根にしたところなど、日本のトタン屋根そつくりの感じがする。背景は山を見せた靑空につゞく。蓋し此部が一番よく出來てゐたやうに思つた。牧場も中々よい。綠の紙を床にして、粘土でこしらへたものや玩具の家畜が遊んでゐる形、背景は靑空と綠の牧場が廣がる。工場には煙突をたてた厚紙の家がたてゝある。木工で出來たトラック、(工場の何倍もある大きさ)が走つてゐるところ。中央の停車場から各場所に通ずるといふわけでふみきりに大きいトラックが通りかゝつてゐる所など實に面白いと思つた。全部が兒童の考案であつて、先生の暗示のはいつてゐないところがよくわかつて實に愉快に感じた。尙仕事をつゞけてゐた子供も出來上つてほつとした態度で立ち上つ

たところで、先生が指圖されて床のごみなど小さい箒で子供がきれいにはきとり、線路の曲つてゐるところなどなほしさて十時半のお茶の時間に子供たちは學校のお姉様やお兄様をつれて來て說明しながら案内する、落ちついた滿足な表情で。一人の女兒が私をも案内して一巡させてくれる。やがて其處をそのまゝにして小さい方の部屋に集り讀み方のお稽古が始まる。約十五分位、圓形を作つて掛かけて短かい文章を畫に添えて書いた掛圖になつて興味多く敎授された。

小さい組即ち幼稚園は獨立した小さい建物になつてゐる。接近はしてゐるが。十人位の少人數、おやつのすんだところで二三人の子供が小さい箒と塵取を持つて掃除をしてゐる。それから皆假裝してドラマチカルプレーが始まる。二三のお母様も見えて我子に仕度をさせてゐる。中々の大仕掛である。其筋を一寸記すと二人の可愛いゝ男女兒（實は王子と王女である）が森の中でたのしく歌ひながら遊んでゐる中に道に迷ひ、やがて勞れて泣きながらねて仕舞ふ。其處へ一人の天使が手に銀の鞭を持ち歌ひながら出て來て舞ふと兎、熊、羊などがひよこ〳〵と出て來て一緒に舞ふ。其處に二人のねてゐるのを見つけて、天使が鞭でさわると二人が起きる、そして一緒に踊るといふ極めて短かいもの。眠つてゐる筈の二人の子供が囁き合ふなど實に面白い。

その日の午後は隨意科の一つのダルグローズのリトミックがあつた。校長がリトミックに特に興味を持つて居られる、これによつて種々獨創力が養はれるといつて居られた。小學六年生の Musical Patan, Making picture. が面白い。先生の音樂に合せて各自の好むポーズを作る、そして其處に畫を表す。横倣と練習とに限られた普通の遊戯に見られぬ子供の滿足感がうかゞはれる。小さい人たちも可なりむづ

かしい拍子をこなしてゐた。

モンテツソリー式ミス、グレバース幼稚園

ミス、グレーバースのモン氏式の幼稚園は私立の者として比較的上流の子供を收容する有名なる幼稚園である。モン氏式として純粹のものではないが、モン氏式の遊具のみを用ひてゐる。幼兒は滿三歲から六歲まで二十五人。部屋の四方に添ふてたゝんでたてかけてある輕い一人用の一人で持ち運びの出來るテーブルをめいめい靜かに自分で運んでたてる。更にたゝみ椅子をも運び自分の席を作る、如何にも靜かに。

自由選撰の遊びが始まる。皆モン氏の遊具を持つてゝ年長兒の二三は繪本のひろい讀みをしてゐる。無言で(此間聲を出すことをゆるさぬ)計へ方の練習をする子供もある。其教具はモン氏の者以外に此處の先生の工夫になるものもある。先生は其間指導を要する處へしばらく腰かけられる。或る子供たちは床上に自分でラッグを敷き文字の綴りをし、數の遊び(玉を一つから十までつないだもの)をしてゐる。年少兒がサンドペーパーのアルハベットを指先きでなでゝあかず次から次と試みてゐる。先生が切りに指の運びを指導される。さわがしくはないが、相當話し聲が聞える。すると先生が沈默(サイレンス)の札をかけると無言になる。可なりきびしい躾けである。十時におやつ、思ひ〳〵のものを持つて來てゐる、果物が多い。先生は一人なので皮むきに中々いそがしい。ランチ(おやつ)のあと二三分眼を閉ぢそのあとで音をたてないやうに一人づゝピアノの傍に呼ばれる。ピアノに合せて簡單な動作をする。此日は特別に體操の先生が來られる日でそのあとで子供はテーブルを元の位置に片づけて其處で體操をする。先生は二人來られて、

一人はピアノを彈かれる。中々きびしく列を作り、ピアノに合せて體操をする。踊りではない、廿分間、氣をつけ、休め、の號令で日本の小學校の生徒のする樣に極めて正確に運動をする、緊張して先生の號令のまゝに併も愉快氣に可なりむづかしい身體各部の運動をする樣には感じ入つた。あとで先生は子供の柔順性を養ふ上に體育の上に此種の運動を最もよいと信ずるといつて居られた。一週二回試みてゐるといふ。十一時半頃からそろそろ迎への人が來られ、小さい方の部屋一ぱいになる、十二時にはすつかりかへる。

メリタス　ストリート小學校

ロンドンにあるモン氏式幼稚園小學校として見るべきものとして紹介された他の一つが此學校である。年少級（ジュニア）は滿五歳から九歳までモン氏式でその上は組制度で教授してゐる。徹底しては居らないが今日モン氏式は幼稚園から小學校の初年級だけ採用するのが多いやうである。モン氏の教育法の可否に就いて種々學者の說を異にしてゐるが其實際を見る時、感覺練習より始まり實に多種多樣な併も整然たる系統の中に學理的に排列した教具によつて生徒各自が自學自習の方法で進み、併も各個人的である點に於て、注入的な一齊教授法にまさる事萬々であると思つた。幼稚園に於ける此システムは今日可なりの議論があり、私も少くも幼兒の活動を極限する點に於て全然此式による方法を取らない。しかし幼兒の日常生活を保育の實際に取り入れる點に於て、其理論と實際の上にモン氏の教育法を指針とするものである。で完全に揃つたモン氏の教具を一そろい持ちたいものだと思つてゐる。

一人の女兒がミユージカルベルスを鳴らしながら音を調べて並べ何か唱歌の譜を讀みながらその鈴を

鳴らして樂を奏してゐた。自分はそれを見て最初の耳の練習に非常に効果のあるものではないかしらと思つた。子供が玩具の小さいオーガンなどの調律のあやしいものに耳を毒される事を常に心配して居るので。

三四五歳兒の遊びを觀たがその教具による遊びに就ては此處に略す。部屋の隅の手洗場の光景が實に興味あるものであつた。小さい手洗鉢の中に手を洗ふ水を滿たした水入がはいつてゐる。よごれた水をこぼすバケツが下に置いてあり、手拭と鉢拭と幼兒の手洗ひの時に掛けるエープロンが二つ三つわきにかけてある。可愛いゝ四つ位の女兒が水入れの水を鉢に移して實にゆつくりと叮寧に上手に手を洗ひ、水を捨て、鉢の中を拭ひ再び水入を鉢の中に入れておく、次の子も同樣、水が水入に無くなると自分のすんだあとでいれておく。次の部屋を見ると一人が切りに手を洗つてゐると、一人男の子が其傍の椅子に腰かけていつまでも待つてゐる。驚くべき躾だと思ふ。英國の人の落ちつきと、がまん强さは此種の躾から來るのであらう。子供だからと先きを爭ふ不躾をゆるし、然も我勝ちに他を押しのけるのを元氣がよいなどゝ喜ぶ親の躾けでは、現在のバスや電車の乘り降りの光景は、大人になつてから言ひ聞かされた心得などでは、永久に改められぬであらう。

この小學校は日本の公立小學校ともいふべきもので英國では中產階級以下の兒童の學ぶところでヂュニアだけでも數百人居る、右の躾けをうける子供は一組四十人もゐるのである。

入學檢定の結果

附屬小學校主事　堀　七　藏

一

東京女子高等師範學校附屬小學校に於て昭和六年一月施行せる入學檢定の結果につき說明することは、幼稚園教育に於て多少參考となるべき點があると信ずるから、特に左の統計を發表する。勿論入學檢定は兒童の身體及精神の發育狀況につき行つたもので、この結果總合的に優良なものより入學許可をなしたのである。從つて精神發達の程度優秀なるものも、身體の發育上故障を認め、また身體薄弱のものは成るべく合格せしめない方針をとつたこと勿論である。殊に附屬小學校第一部は附屬高等女學校と連絡せる教育を施し、その研究をなすものであるから身體的故障のため中途にして退學せざるべからざるが如き狀態に成るべく遭遇しないことを望むからである。

二

男女の兒童を通じて幼稚園在園兒童は精神發達の程度が良好であるべきことは當然ではあるが、左の數字は之を證明し得るものではあるまいか。

男兒の檢定を受けたる總數　一〇三人

內譯

第二部　三三人　　第三部　四一人

附屬幼稚園（第一部第二部）　二九人

女兒の檢定を受けたる總數　一四六人

內譯

第一部　六一人、　第二部　三六人

第三部　三六人、附屬幼稚園（第二部）一三人

茲に第一部第二部などとなせるものは抽籤の結果による第一部第二部等の入學候補者である。また附屬幼稚園とあるは當校附屬幼稚園より無檢定にて入學する第一部女兒を除きたるもので、無抽籤にて入學檢定を受けるものである。而して入學檢定は第一部女兒は第一日に行はれ、第二部第三部女兒は第二日に行はれ、男兒は凡て第三日に行はれたものである。勿論第一日第二日第三日と檢定の問題は多少變化してゐるが、凡ての兒童の智能發達の狀況を査定する上に於て、公平平等を期し、附屬幼稚園よりの兒童も他と同樣なる問題で同一態度で檢定したのである。

以上の檢定兒童を幼稚園より來れるものと、家庭より直接來たれるものとに二類すると、左の如き結果を示すのである。

		檢定數	合格者數	同上歩合	候補者數	同上歩合	不合格者數	同上歩合
在園者	第二部	三	一		一			
	第三部	二七	六		二		一九	
	合計	四〇	七	一四・五	三	六・三	三六	五七・七
家庭より	第二部	三	六		一		六	
	第三部	四四	四		一		九	
	合計	二七	一〇	三七・〇四	二	五・九	一五	五七・〇四
附屬幼稚園		二九	一一	三七・九	八	二七・五	一〇	三四・四

これを見るときは合格歩合の最も大なるは附屬幼稚園で、他の幼稚園よりの男兒は直接家庭より來れるものより著しく劣つてゐる。東京高等師範學校附屬小學校の入學檢定が行はれた後に於て、東京女子高等師範學校入學檢定を行つたのであるから、幼稚園幼兒の優秀なるものが多く、選拔せられた殘餘についての結果である。それで若し東京高等師範學校附屬小學校入學者について幼稚園出身者の合格率が大なりとせば、茲に示す結果を

補充して幼稚園出身者が家庭より直接のものより、合格歩合が優秀であるといふことにならう。附屬幼稚園の男兒が四十人中十一人も東京高師附屬小學校に入學合格をなし、その殘餘二十九人中、十一人も女高師附屬小學校に入學合格をなし、家庭よりの合格歩合よりも優秀であり、更に候補者を合算するときは家庭よりの歩合が四二・九六なるに比し　附屬幼稚園の方は六五・五一で、遙かに優秀なることは幼稚園教育が幼兒の身體並に精神の發達に於て大に價値あることを物語るものと推定せねばならぬ。幼稚園教育の結果を疑ふ人々と雖も、是等の統計によつて幼稚園教育の價値の一端が明白となると考へられる。殊に附屬幼稚園よりの兒童にはトラホームの疑あるもの殆ど皆無なるに、家庭よりの兒童にも他の幼稚園在園者にも相當トラホームの疑あるもの、また明白にトラホームにかゝれるものあるは注目すべき現象である

第二に、女兒に、ついて見ると次の如くである。

		檢定數	合格者數	同上歩合	候補者數	同上歩合	不合格者	同上歩合
在園者	第一部	四一	一六		一		二五	
	第二部	二九	八		二		一九	
	第三部	三〇	八		二		二〇	
	合計	一〇一	三四	三三・六六	五	四・九五	六二	六六・三四
家庭より	第一部	一九	四		二		一三	
	第二部	七	二		〇		五	
	第三部	六	二		〇		四	
	合計	三三	八	二五・〇〇	二	六・二五	二三	六五・〇〇
附屬幼稚園より		三一	七	五三・八五	二	三三・〇五	二四	四六・一五

これを見るときは附屬幼稚園第二部より無抽籤にて檢定を受けたるもの十三人中七人合格し、三人候補者となり、殘り三人不合格者となれるもので、合格歩合は五三・八五である。若し候補者をも合格者と見做すときはその歩合は七六・九二の高率を示す。他の幼稚園より檢定を受けたるもの一〇一人中合格者三四人、候補者となれるもの五人、殘り六二人が不合格者で、合格歩合は三

三・六六である。更に候補者をも合格者と見做すときは三八・六一となる。從つて略附屬幼稚園の半數の歩合を示すのである。而して家庭より來れるもの、三二人中合格者八人にして候補者二人、不合格者二二人である。故に家庭より直接入學檢定を受けて合格せるものの歩合は僅かに二五・〇〇であり、候補者を合算するも三一・二五である。これを以て見れば明白に幼稚園教育を受けつゝあるものは身體精神共に良好な發育をなせるものが多數あることを示すものである。檢定の實數が少いから個人差にもより、また家庭のよろしきことも原因であるが、また幼稚園教育の効果の著しきこともその重要なる原因をなすに相違ないことが明白であらう。

二

次に身體精神の發達狀況を檢定せる結果を示はしめ、その間に身體動作等を通して見たる人物す。先づ各欄につき說明する。第一欄の生年月に於て大正十四年四月一日生は一四・三となしてある。第二欄の身體檢査に於て內科醫が總合的判斷を下したる結果である。强、强下、中上、中、中下の五級に分け、更に?を附せるものは不合格となすを可となすものである。第三欄の「解釋」となせるは繪につき、いろ〳〵の問答を試みたる結果によつて採點せるもの、第四欄の「觀念」となせるは實物の觀察又は觀念につき相異などを比較せしめたる結果につき採點せるもの、第五欄の「構成」は幾何形體を構成せしめたるものである。第六欄の「數觀念」は實物又は數につき數へしめ、基數の加減を行はしめたる結果であり、第七欄の「畫くこと」は幾何形を見て畫かしめた結果であり、第八欄の「判斷」は兒童の生活について問を出し、之に對する判斷を行はしめた結果である。而して第九欄の「人物」にては三つの用事を言つけて之を行

はじめ、その間に身體動作を通じて見たる人物評點であり、第十欄の「動作」は專ら兒童に運動を行はしめた結果である。何れも滿點を五點として零點まで、六級に採點したのである。その合計點が第十一欄に出てゐる。第十二欄に於ける○は幼稚園よりの受檢者で×は直接家庭よりの受檢者である。既に述べたるが如く第一日と第二日と第三日とには精神檢査の項目は同一でも、その內容を變化したもので、男兒は第二部の次に附屬幼稚園、その次に第三部といふ順序をとり、是等三團の兒童を身長順に番號をつけ、檢定したものである。故に檢定をなすものには全く兒童名も保護者名も一切不明となし、出來るだけ公平に兒童の身體の發達程度を檢定した結果である。

第二部　男

生年月	身體檢査	解釋	觀念	構成	念	數	觀	畫く	こと	判斷	人物	動作	計	番號
三七・一二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	四〇	一
三四・一一	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	四	四	三七	二
三七・二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三六	三
三六・一一	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	四
三四・一二	強下	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	五
三四・一二	強下	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	六
三四・一七	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	七
三四・一一	強下	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	八
三四・一七	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	九
三四・二一	強下	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一〇
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一一
三四・二七	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一二
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一三
三四・二五	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一四
三四・二八	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一五
三四・二七	強下	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一六
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一七
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一八
三四・二八	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一九
三四・二五	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二〇
三四・二二	強下	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二一
三四・二七	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二二
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二三
三四・二一	強下	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二四
三四・一七	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二五
三四・二七	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二六
三四・二四	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二七
三四・二九	強下	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二八
三四・二二	強下	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二九
三四・一一	強下	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	三〇
三四・二六	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	三一
三四・二六	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	三二
三四・二四	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	三三
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	三四
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	三五
三四・二四	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	三六
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	三七
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	三八
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	三九
三四・二四	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	四〇
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	四一
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	四二
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	四三
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	四四
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	四五
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	四六
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	四七
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	四八
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	四九
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	五〇
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	五一
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	五二
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	五三
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	五四
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	五五
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	五六
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	五七
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	五八
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	五九
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	六〇
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	六一
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	六二
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	六三
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	六四
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	六五
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	六六
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	六七
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	六八
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	六九
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	七〇
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	七一
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	七二
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	七三
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	七四
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	七五
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	七六
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	七七
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	七八
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	七九
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	八〇
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	八一
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	八二
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	八三
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	八四
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	八五
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	八六
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	八七
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	八八
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	八九
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	九〇
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	九一
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	九二
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	九三
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	九四
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	九五
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	九六
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	九七
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	九八
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	九九
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一〇〇
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一〇一
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一〇二
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一〇三
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一〇四
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一〇五
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一〇六
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一〇七
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一〇八
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一〇九
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一一〇
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一一一
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一一二
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一一三
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一一四
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一一五
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一一六
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一一七
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一一八
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一一九
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一二〇
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一二一
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一二二
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一二三
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一二四
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一二五
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一二六
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一二七
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一二八
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一二九
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一三〇
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一三一
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一三二
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一三三
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一三四
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一三五
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一三六
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一三七
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一三八
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一三九
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一四〇
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一四一
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一四二
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一四三
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一四四
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一四五
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一四六
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一四七
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一四八
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一四九
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一五〇
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一五一
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一五二
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一五三
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一五四
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一五五
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一五六
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一五七
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一五八
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一五九
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一六〇
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一六一
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一六二
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一六三
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一六四
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一六五
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一六六
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一六七
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一六八
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一六九
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一七〇
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一七一
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一七二
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一七三
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一七四
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一七五
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一七六
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一七七
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一七八
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一七九
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一八〇
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一八一
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一八二
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一八三
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一八四
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一八五
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一八六
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一八七
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一八八
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一八九
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一九〇
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一九一
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一九二
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一九三
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一九四
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一九五
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一九六
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一九七
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一九八
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	一九九
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二〇〇
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二〇一
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二〇二
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二〇三
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二〇四
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二〇五
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二〇六
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二〇七
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二〇八
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二〇九
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二一〇
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二一一
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二一二
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二一三
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二一四
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二一五
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二一六
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二一七
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二一八
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二一九
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二二〇
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二二一
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二二二
三四・二二	中上	四	五	五	五	五	五	五	四	四	五	四	三四	二二三
三四・二二	中上	四	五

第三部男

三・四	中上	五	四	四	五	五	四	五	五	三七	一	幼
三・七	強下	四	四	五	五	五	四	四	五	三六	二	×
三・四	中上	三	四	四	五	五	五	五	三	三四	三	幼
三・一一	中上	三	四	五	五	五	三	三	五	三三	四	幼
四・一	強下	三	四	三	四	五	五	四	五	三三	五	幼
四・二	中上	四	五	三	五	四	五	四	三	三三	六	×
四・一	中	四	四	四	四	五	二	五	四	三二	七	幼
三・一〇	強下	三	四	四	五	五	三	四	四	三二	八	幼
四・二	中上	五	五	五	二	五	三	二	五	三二	九	幼
三・八	中上	四	三	三	四	五	四	四	五	三二	一〇	×
四・二	中上	四	四	五	五	五	二	五	二	三二	一一	×
三・八	△中上？	三	四	五	五	五	一	四	五	三二	一二	幼
三・四	中上	四	三	三	四	五	四	三	五	三一	一三	×
四・一	中	三	三	三	四	五	五	五	三	三一	一四	幼
四・一		二	四	四	四	五	五	五	二	三一	一五	幼
四・一	△中？	三	三	二	四	四	五	四	五	三〇	一六	幼
三・一一	△中	三	三	五	三	五	四	五	二	三〇	一七	幼
四・二	△中上	五	四	二	四	五	三	三	四	三〇	一八	幼
四・二	中	三	四	三	二	四	五	四	四	二九	一九	幼
四・一	中	三	三	五	五	五	一	四	二	二八	二〇	幼
三・九	中上	四	四	四	三	五	三	二	三	二八	二一	幼
三・八	強下	四	二	一	五	五	二	五	四	二八	二二	幼
三・九	中上	三	四	二	五	四	二	五	三	二八	二三	×
三・一〇	下	四	二	一	四	五	二	五	五	二七	二四	幼
三・一一	中	三	二	三	五	五	一	四	三	二七	二五	幼
四・三	△強下	四	二	三	五	五	二	二	四	二七	二六	幼
四・三	△中上	四	四	三	二	三	四	四	三	二七	二七	×
三・一二	中上	三	三	二	三	五	三	四	三	二六	二八	幼
三・一〇	中	三	二	三	五	三	三	五	二	二六	二九	×
三・六	中上	二	二	五	三	三	四	三	三	二五	三〇	幼
四・二	中上	四	四	三	二	四	〇	五	三	二五	三一	幼
三・七	中上	四	三	四	三	四	〇	三	三	二四	三二	×
三・一二	中上	三	三	三	二	五	三	四	一	二四	三三	×
四・二	中上	二	二	四	二	四	三	四	二	二三	三四	×
四・三	中上	四	二	五	一	三	一	四	三	二三	三五	幼
四・一	中	二	二	一	三	四	三	三	三	二二	三六	×
三・七	中	二	二	四	二	五	〇	二	四	二二	三七	×

三・一三	△中上	二	二	二	一	三	四	四	三	二一	三八	幼
三・一二	中下	四	二	一	二	五	〇	三	四	二一	三九	幼
三・一三	中上	三	三	二	二	四	一	三	二	二〇	四〇	幼
四・一	中上	三	三	二	一	四	〇	三	一	一七	四一	×
	計	一三八	一三二	一三五	一四五	一八五	一二四	一三九	一四〇	一一四七		

幼 二七人 七七二——二八・五九

× 一四人 三七五——二六・七九

幼稚園男兒

	身體検査	解釋	觀念	構成	數觀念	書くこと	判斷	人物	動作	合計		
三・五	中上	四	五	五	四	五	四	五	五	三七	一	○
二・五	中上	三	四	五	四	五	五	五	五	三六	二	○
三・五	中上	五	三	五	五	五	五	五	三	三六	三	○
三・九	中上	四	四	五	五	四	五	五	三	三五	四	○
三・四	中上	三	四	五	五	五	二	五	五	三四	五	○
四・一	△中上	四	四	三	五	四	五	五	四	三四	六	○
三・九	中	四	四	五	四	四	四	四	四	三三	七	○
三・五	中上	三	四	五	五	五	二	四	五	三三	八	○
四・二	中上	五	二	四	五	五	四	四	四	三三	九	○
三・六	中？	四	三	五	五	五	三	五	三	三三	一〇	○
三・七	中上	五	四	五	二	五	三	五	四	三三	一一	○
三・四	中上	四	四	四	五	四	三	三	五	三二	一二	○
三・八	中上	四	三	二	五	四	五	五	四	三二	一三	○
三・一一	中上	三	三	四	四	五	三	五	五	三二	一四	○
三・一二	強	四	三	三	五	五	五	四	三	三二	一五	○
三・三	強下	三	五	三	五	五	二	五	四	三二	一六	○
三・一二	強下	四	五	二	五	四	四	四	四	三二	一七	○
三・八	中下	三	四	五	五	四	三	三	四	三一	一八	○
三・九	強下	三	五	三	二	五	三	四	五	三〇	一九	○
四・二	強	三	三	三	四	五	五	四	三	三〇	二〇	○
三・一〇	中上	四	四	三	四	五	一	四	五	三〇	二一	○
三・四	中上	三	五	二	五	五	三	五	二	三〇	二二	○
四・三	強下	三	五	二	四	四	二	四	五	二九	二三	○
三・七	強下	四	三	三	一	五	三	五	四	二八	二四	○
三・五	中上	四	四	三	四	三	一	四	三	二八	二五	○

	中上	強	強下	中	中下	計
一四・三	三	四	二	二	一	一〇
一三・三	四	四	五	三	二	二三
一四・一	二	二	二	二	一	一〇
一四・二	二	二	四	五	三	三〇
	二	五	五	四	三	三三
	二	二	二	三	四	二九
	二	四	三	五	四	三七
	三	三	三	三	二	二三
	二六	二六	二五	二六	二九	二九人
	二六〇	二七〇	二〇〇	二〇〇	〇〇	〇〇

以上の實數を統計すると次の如くなる。

	第二部 總得點	平均得點	第三部 總得點	平均得點
在園者	三一 五七五	二一・〇五	二二人 七七二	二八・九二
家庭より	一三 四〇五	三一・一五	一四人 三七五	二六・七九
附屬幼稚園			二九人 九〇六	三一・二四

而して第二部第三部を通じて在園者四八人、その總得點一三四七點にして、一人平均二八・六の得點がある。然るに家庭よりの者二七人、その總得點は七八〇點にして、一人平均二八・八九の得點がある。故に得點の多きは附屬幼稚園の三一・二四點にして、次が家庭よりの者である。他の幼稚園よりの男兒の得點が最も惡い。

また身體檢査の結果を表にすると左の如くなる。

	檢査人員	強	強下	中上	中	中下
在園者	四八人	〇	七人	二二人	一九人	
家庭より	二七人	〇	五人	一四人	七人	一人
附屬幼稚園	二九人	三人	七人	一七人	二人	

更に之が檢定人員に對する歩合を求めると次の如くなる。

	強	強下	中上	中	中下
在園者	〇	一四・五八	四五・八三	三九・五九	〇
家庭より	〇	一八・五二	五一・八五	三五・九三	三・七〇
附屬幼稚園	一〇・三五	二四・一四	五八・六一	六・九〇	〇

この結果を見ると在園者は直接家庭より來れるものよりも中上、強下の者の歩合惡く、中以下のものが多い。これは幼稚園教育に於て幼兒を保育して身體を健全に發達せしめることに留意せねばならぬことを暗示するものといはねばならぬ。附屬幼稚園に於ては中のもの僅かに六・九にして中上のもの五八・六一であり、更に強下も強も甚だ多いことを示すのは幼稚園保育に於て精神の發達

一四・二	四	一二〇	九	二三七
一四・三	〇	〇	一〇	二六八
計	一三	四二三	四九	一三〇五
	(三二・五)		(二六・六〇)	

以上の實數を見ると各月の分配は甚だ僅少なる數に止まるを以て、得點の平均を求めるも殆ど價値がない。それで四月より九月までの年長者と、十月より三月まで年少者とに二分して比較するときは年長者十五人の合格者が總得點五二〇にして、一人平均三四●六の得點を示すに對し、年少者は合格者十三人、その總得點は四二三で一人平均三二●五の得點である。また不合格者に於て年長者は二五人、その總得點七三〇で、一人平均得點二九●二であるに對し、年少者は四九人、その總得點一三〇五、一人平均得點二六●六である。故に年長者は合格者が一人平均二●一點多く、不合格者は一人平均二●六點多いのである。尚年長者は合格不合格を通じて檢定人員四〇人。

三

尚ほ年齡と精神發達との關係を見ると左表の如くである。

生年月	合格者數	得點	不合格者數	得點
一三・四	三	一〇五	四	一二五
一三・五	四	一四二	二	五六
一三・六	一	三三	二	五九
一三・七	四	一四三	七	一九三
一三・八	〇	〇	七	二一一
一三・九	三	九七	三	八六
計	一五	五二〇	二五	七三〇
	(三四・六)		(二九・二)	

一三・一〇	〇	〇	六	一六五
一三・一一	二	六六	七	一八六
一三・一二	一	三二	七	一七九
一四・一	六	二〇五	一〇	二七〇

その總得點は一二五〇點、平均得點三一・二五であり、年少者は六二人、その總得點一七二八點、平均得點二七・八七點である。故に年長者は年少者より平均得點に於て三・三八多いのである。之により滿六歲位の兒童に於ては年齡差が如何に精神發達に大なる相異を生ずるものか明白である

四

次に女兒についての統計を示す。

附屬幼稚園女兒

生年月	身體檢査	解釋	觀念	構成	數觀念	書くこと	人物判斷	動作	計	番號
三・八	中上	四	五	三	四	五	三	五	三四	一
三・一〇	中上	四	五	三	三	五	三	五	三四	二
三・一二	強下	四	五	三	四	五	三	五	三四	三
三・七	中上	三	四	一	三	四	一	四	二六	四
三・一	中上	三	三	一	三	四	三	四	二七	五
三・八	中上	三	四	三	三	四	三	四	二七	六
三・一二	強下	四	五	五	三	四	五	五	三六	七
四・三	中上	四	五	五	四	五	五	五	三六	八
四・三	強下	四	五	五	五	五	五	五	三六	九
三・一	中上	四	三	二	三	三	三	五	三四	一〇
三・八	中上	四	五	五	四	五	四	五	三六	一一
三・一	強下	四	五	五	四	五	四	五	三六	一二
三・一	中上	四	五	五	四	五	四	五	三六	一三
三・七	強下	四	五	五	四	五	四	五	三六	一四
三・七	強下	三	五	三	四	五	四	五	三四	一五
三・九	中上	四	四	二	三	四	三	四	二六	一六
三・八	中上	四	五	二	四	五	三	五	三四	一七
三・一〇	強下	四	五	二	三	五	三	五	三四	一八
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一九
三・一	強下	四	五	二	三	五	三	五	三四	二〇
三・一	強下	四	五	二	三	五	三	五	三四	二一
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二二
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二三
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二四
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二五
三・一	強下	四	五	二	三	五	三	五	三四	二六
三・一	強下	四	五	二	三	五	三	五	三四	二七
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二八
三・一	強下	四	五	二	三	五	三	五	三四	二九
三・一	強下	四	五	二	三	五	三	五	三四	三〇
三・一	強下	四	五	二	三	五	三	五	三四	三一
三・一	強下	四	五	二	三	五	三	五	三四	三二
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	三三
三・一	強下	四	五	二	三	五	三	五	三四	三四
三・一	強下	四	五	二	三	五	三	五	三四	三五
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	三六
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	三七
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	三八
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	三九
三・一	強下	四	五	二	三	五	三	五	三四	四〇
三・一	強下	四	五	二	三	五	三	五	三四	四一
三・一	強下	四	五	二	三	五	三	五	三四	四二
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	四三
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	四四
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	四五
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	四六
三・一	強下	四	五	二	三	五	三	五	三四	四七
三・一	強下	四	五	二	三	五	三	五	三四	四八
三・一	強下	四	五	二	三	五	三	五	三四	四九
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	五〇
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	五一
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	五二
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	五三
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	五四
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	五五
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	五六
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	五七
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	五八
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	五九
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	六〇
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	六一
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	六二
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	六三
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	六四
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	六五
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	六六
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	六七
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	六八
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	六九
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	七〇
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	七一
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	七二
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	七三
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	七四
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	七五
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	七六
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	七七
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	七八
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	七九
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	八〇
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	八一
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	八二
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	八三
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	八四
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	八五
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	八六
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	八七
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	八八
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	八九
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	九〇
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	九一
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	九二
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	九三
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	九四
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	九五
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	九六
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	九七
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	九八
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	九九
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一〇〇
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一〇一
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一〇二
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一〇三
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一〇四
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一〇五
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一〇六
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一〇七
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一〇八
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一〇九
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一一〇
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一一一
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一一二
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一一三
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一一四
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一一五
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一一六
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一一七
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一一八
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一一九
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一二〇
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一二一
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一二二
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一二三
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一二四
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一二五
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一二六
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一二七
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一二八
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一二九
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一三〇
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一三一
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一三二
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一三三
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一三四
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一三五
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一三六
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一三七
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一三八
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一三九
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一四〇
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一四一
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一四二
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一四三
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一四四
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一四五
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一四六
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一四七
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一四八
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一四九
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一五〇
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一五一
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一五二
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一五三
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一五四
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一五五
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一五六
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一五七
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一五八
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一五九
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一六〇
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一六一
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一六二
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一六三
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一六四
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一六五
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一六六
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一六七
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一六八
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一六九
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一七〇
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一七一
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一七二
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一七三
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一七四
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一七五
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一七六
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一七七
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一七八
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一七九
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一八〇
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一八一
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一八二
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一八三
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一八四
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一八五
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一八六
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一八七
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一八八
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一八九
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一九〇
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一九一
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一九二
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一九三
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一九四
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一九五
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一九六
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一九七
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一九八
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	一九九
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二〇〇
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二〇一
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二〇二
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二〇三
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二〇四
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二〇五
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二〇六
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二〇七
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二〇八
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二〇九
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二一〇
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二一一
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二一二
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二一三
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二一四
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二一五
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二一六
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二一七
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二一八
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二一九
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二二〇
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二二一
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二二二
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二二三
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二二四
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二二五
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二二六
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二二七
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二二八
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二二九
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二三〇
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二三一
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二三二
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二三三
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二三四
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二三五
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二三六
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二三七
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二三八
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二三九
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二四〇
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二四一
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二四二
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二四三
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二四四
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二四五
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二四六
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二四七
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二四八
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二四九
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二五〇
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二五一
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二五二
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二五三
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二五四
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二五五
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二五六
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二五七
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二五八
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二五九
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二六〇
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二六一
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二六二
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二六三
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二六四
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二六五
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二六六
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二六七
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二六八
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二六九
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二七〇
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二七一
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二七二
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二七三
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二七四
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二七五
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二七六
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二七七
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二七八
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二七九
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二八〇
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二八一
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二八二
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二八三
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二八四
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二八五
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二八六
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二八七
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二八八
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二八九
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二九〇
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二九一
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二九二
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二九三
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二九四
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二九五
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二九六
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二九七
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二九八
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	二九九
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	三〇〇
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	三〇一
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	三〇二
三・一	中上	四	五	二	三	五	三	五	三四	三〇三

番號	生年月	身體檢查	解釋	觀念	構成	數觀念	畫くこと	判斷	人物	動作	計	
三五	一三・九	中	五	五	二	三	四	三	四	三	二九	○
三六	一四・三	中上	五	五	二	四	〇	五	五	三	二九	○
三七	一三・四	中上	五	四	三	一	五	三	三	五	二九	×
三八	一三・六	強下	五	四	二	四	四	三	三	四	二九	○
三九	一三・一三	△中上	五	三	一	三	三	四	五	五	二九	×
四〇	一四・一	強下	四	三	二	三	五	三	五	四	二九	×
四一	一三・七	強下	五	五	四	二	三	一	三	五	二八	○
四二	一三・六	強下	三	三	三	五	四	二	四	四	二八	×
四三	一三・一〇	強	三	五	四	四	四	〇	四	四	二八	○
四四	一四・二	強下	五	四	一	四	四	一	四	五	二八	○
四五	一四・四	中	五	三	三	四	三	三	四	三	二八	○
四六	一四・三	強	四	三	三	五	四	三	三	三	二八	○
四七	一三・七	中上	三	五	五	二	四	二	四	三	二八	○
四八	一四・三	中	四	四	一	五	三	三	五	三	二八	○
四九	一四・一	強下	五	四	二	三	四	三	四	三	二八	×
五〇	一三・九	中上	四	三	三	五	四	四	三	一	二七	○
五一	一三・六	中	三	三	五	二	一	四	四	五	二七	○
五二	一三・五	△中上	五	三	四	二	四	三	二	四	二七	×
五三	一四・一	強下	五	三	四	二	四	一	三	五	二七	○
五四	一四・二	強	五	四	二	三	〇	二	五	五	二六	○
五五	一四・三	△強下	三	四	一	四	五	二	三	四	二六	×
五六	一三・九	中上	四	四	四	二	四	一	三	四	二六	×
五七	一四・一	中	四	四	三	一	四	一	五	四	二六	×
五八	一四・三	中上	五	三	四	二	二	一	四	四	二五	×
五九	一四・四	中上	四	三	五	二	三	一	三	四	二五	○
六〇	一三・五	中下	四	三	三	三	二	一	四	四	二四	×
六一	一四・三	強	四	一	三	二	四	一	三	五	二三	×
計			二七三	二五一	二三三	二三五	二三七	一九一	二四八	二五八	一八八六	

○一、三二九——四二人　三一・六四

×　五五七——一九人　二九・三二

第二部女兒

番號	生年月	身體檢查	解釋	觀念	構成	數觀念	畫くこと	判斷	人物	動作	計	
一	一三・三	△強下	五	四	五	三	五	五	二	五	三四	×
二	一三・一〇	強下	五	五	二	五	五	五	二	五	三四	幼
三	一三・一〇	強下	五	五	五	五	四	二	四	四	三四	幼
四	一四・一	中	四	五	四	二	五	五	五	四	三四	幼
五	一三・一〇	中	五	五	三	三	四	五	三	五	三三	幼
六	一三・七	中	三	四	四	三	五	四	四	五	三二	幼
七	一三・七	強	五	三	三	四	四	四	五	四	三二	×
八	一三・一一	中上	五	四	三	五	五	二	三	五	三二	幼
九	一三・七	中	五	五	一	五	四	四	四	四	三二	幼
一〇	一三・六	中	五	四	二	五	三	四	四	五	三二	幼
一一	一三・二	強下	五	三	二	四	五	三	五	五	三二	幼
一二	一三・一三	△中上	二	四	四	二	五	五	四	五	三一	幼
一三	一三・九	中上	四	四	二	四	四	四	五	四	三一	幼
一四	一三・七	中上	四	四	一	四	四	五	四	四	三〇	幼
一五	一三・一〇	強下	四	五	二	五	二	四	五	三	三〇	幼
一六	一三・一〇	△中	五	四	二	五	三	四	四	三	三〇	×
一七	一四・一	△強下	四	三	三	五	五	二	三	五	三〇	幼
一八	一三・四	強下	三	三	三	五	四	三	三	五	二九	幼
一九	一三・五	中上	五	五	一	三	三	四	四	四	二九	幼
二〇	一三・六	強下	四	二	五	五	四	一	三	五	二九	幼
二一	一三・四	中上	四	四	二	四	五	一	三	五	二八	幼
二二	一三・四	中	四	五	一	三	三	五	三	四	二八	幼
二三	一四・三	強下	四	四	一	三	四	四	四	三	二七	×
二四	一三・九	中上	三	三	一	五	四	三	三	五	二七	幼
二五	一四・一	中上	四	三	一	五	五	二	三	四	二七	幼
二六	一四・一	中	三	四	二	二	五	三	三	五	二七	幼
二七	一四・二	強	二	四	一	四	四	四	三	三	二五	幼
二八	一四・三	中	四	四	五	五	三	〇	二	二	二五	幼
二九	一三・八	中上	三	三	一	五	三	一	四	五	二五	幼
三〇	一三・六	中	三	三	一	二	二	五	三	三	二二	幼
三一	一四・三	中上	三	三	一	三	四	三	二	三	二二	×
三二	一三・九	中	三	三	一	二	五	一	三	四	二二	×
三三	一四・二	中上	二	四	三	三	二	一	三	二	二〇	幼
三四	一三・一三	中上	二	三	〇	五	四	一	三	三	二〇	×
三五	一四・一	中	二	四	一	、	三	三	、	四	一九	幼
三六	一四・三	強下	〇	〇	、	、	、	、	一	、	一五	×
計			一三三	一三五	七六	一三五	一三九	[illegible]	[illegible]	一四六	九九九	

幼　八二八——二九人　二八・五五

×　一七一——七人　二四・四三

第三部女兒

番號	生年月	身體檢查	解釋	觀念	構成	數觀念	書くこと	判斷	人物	動作	計	
一	一三•一〇	中上	三	五	五	四	四	五	五	五	三六	○
二	一三•九	中上	三	四	五	五	五	四	五	五	三六	○
三	一三•一〇	中	四	四	五	五	五	五	五	三	三六	×
四	一三•六	△中上	五	四	五	二	四	五	五	四	三四	×
五	一四•一	中	四	二	四	五	五	三	五	五	三三	○
六	一三•四	中上	五	四	五	四	四	二	四	四	三二	○
七	一三•五	中	四	四	四	五	四	五	二	四	三二	○
八	一三•一〇	△強下	五	四	三	二	五	五	四	四	三二	○
九	一三•一二	△強下	三	三	三	四	五	五	四	五	三二	○
一〇	一四•三	強下	四	四	一	五	五	三	五	四	三一	○
一一	一四•三	強下	四	五	二	五	四	四	四	三	三〇	○
一二	一三•一一	△中上	三	四	三	三	四	三	五	五	三〇	○
一三	一四•三	中上	五	三	三	二	五	四	三	五	三〇	○
一四	一四•二	中	四	四	三	二	五	四	三	五	三〇	○
一五	一四•二	△中上	四	四	二	四	四	三	三	五	二九	○
一六	一三•四	△強下	四	四	三	五	五	〇	四	四	二九	○
一七	一四•一一	強下	三	三	四	五	四	二	三	五	二九	○
一八	一四•二	△中上	四	五	一	五	四	四	五	一	二九	○
一九	一四•一	△強下	三	四	四	三	三	三	五	四	二九	○
二〇	一四•二	△中上	四	四	二	五	五	二	四	三	二九	○
二一	一四•一	△強下	三	三	四	四	五	二	五	三	二八	○
二二	一四•三	△中上	四	四	一	四	三	四	四	四	二八	○
二三	一三•七	中上	三	五	一	一	三	五	五	四	二七	×
二四	一三•九	強下	二	四	三	一	四	五	三	五	二七	×
二五	一三•七	中	四	三	二	五	五	二	三	三	二七	○
二六	一三•一〇	中上	五	三	四	四	三	一	三	三	二六	○
二七	一三•四	中上	三	四	二	二	五	一	五	四	二六	○
二八	一四•二	中上	三	三	二	一	四	四	五	四	二六	○
二九	一四•一	強下	四	三	一	三	四	一	四	四	二四	○
三〇	一三•四	中	三	三	二	五	三	二	三	三	二四	○
三一	一四•三	中	三	四	一	三	三	三	三	四	二四	○
三二	一四•一	中上	二	四	二	一	三	四	四	三	二三	×
三三	一三•七	中上	二	四	二	二	四	一	三	四	二三	○
三四	一四•二	中上?	二	三	二	一	五	一	三	四	二二	○
三五	一四•一、	強	三	三	一	一	四	三	二	三	二〇	×
三六	一三•一一	強下	二	三	二	一	〇	二	三	四	一七	○
計			一二六	一三四	九九	一二九	一四七	一一二	一四一	一四三	一〇一九	

二八•四〇　○八五二——三〇人

二七•八三　×一六七——六人

以上の實數を統計すると左の如くなる

		檢定人員	總得點	一人平均得點
在園者	第一部	四二人	一三二九	三一•六四
	第二部	二九人	八二八	二八•五五
	第三部	三〇人	八五二	二八•四〇
	合計	一〇一人	三〇〇九	二九•七九
家庭より	第一部	一九人	五五七	二九•三二
	第二部	七人	一七一	二四•四三
	第三部	六人	一六七	二七•八三
	合計	三二人	八九五	二七•九七
附屬幼稚園		一三人	三七六	二八•九二

この表を見ると第一部の得點不均が圖抜けて多いのは第一日の檢定である。第二日には第二部、附屬幼稚園、第三部の順に檢定し、第一日よりも困難なる問題を提出したるにより第二日の方が第一日よりも一般に不平均得點が惡い。それで第二日の檢定

に於て比較するときは附屬幼稚園の平均得點二八九三にして他の幼稚園より來れるものの平均得點は第二部が二八、五五點、第三部が二八●四〇である。その平均は二八●四八點である。また直接家庭より來れるものの平均得點は第二部が二四●四三點にして、第三部は二七●八三點である。之を更に平均するときは二六●一三點で、最も劣つてゐる。又第一日第二日を合して見ると、他の幼稚園より來れるものの平均得點は二九●七九點にして、直接家庭より來れるものは平均得點二七●九七點である。從つて幼稚園から來れるものは遙に優秀で平均得點に於て一●八二點多い。それで檢定人員數が少いから明確なる判斷を下すことは勿論困難であるが附屬幼稚園の平均得點は二八●九二にして他の幼稚園より來れるものの平均得點は二八●四八であるから附屬幼稚園の方が平均得點が多く第一位で次が他の幼稚園、その次が直接家庭より來れるものである。その理由は簡單に判斷出來ないけれども實際の得點に於て幼稚園幼兒の方が一般に良好である。

女兒の身體檢査の結果は左表の如くである。

	檢査人員	強	強下	中上	中	強下
在園者	一〇一人	五人	三一人	三七人	二人	〇
家庭より	三二人	二人	一二人	一二人	六人	〇
附屬幼稚園	一三人	一人	四人	八人	〇	〇

更に之が檢定人員に對する歩合を求めると次の如くである。

	強	強下	中上	中
在園者	四・九五	三〇・六九	三六・六四	二七・七二
家庭より	六・二五	三七・五〇	三七・五〇	一八・七五
附屬幼稚園	七・六九	三〇・七七	六一・五四	〇

この結果を見るときは身體强健なるものの歩合は附屬幼稚園最も高く、次が家庭よりのものである。又强下の者の歩合は家庭よりのもの最も高率で次が附屬幼稚園である。更に中上のものの歩合は附屬幼稚園が最も大で、次が家庭よりのものである。

故に他の幼稚園より來れるものは最も身體の發育がよくないことになり、殊に中のものが最も高率を示してゐるから著しく雜多な狀態にあるといはねばならぬ。

五

次に年齡と精神發達との關係を見ると左表の如くである。

生年月	合格者數	得點	不合格者數	得點
一三・四	五	一六六	一二	三五七
一三・五	一	三五	七	二一一
一三・六	二	五九	七	一九八
一三・七	三	二八五	七	一七八
一三・八	六	二〇五	二	五三
一三・九	七	二三七	六	一五八
計	三〇	九八七	四一	一一五五
	(三二・九)			(二八・一)
一三・一〇	八	二六五	六	一八三
一三・一一	四	一二六	五	一一六
一三・一二	三	一〇二	七	二一〇
一四・一	五	一六二	一五	四〇四
一四・二	一	三五	一〇	一六三
一四・三	六	一九〇	一六	三九五
計	八八〇		五九	一四七一
	(三二・五)			(二四・九)

右に示す如く、一三年四月より一三年九月までの年長者は合格者に於て三二・九點を得、不合格者に於て二八・一點を得てゐる。然るに一三年一〇月より一四年三月までの年少者は合格者に於て三二五點、不合格者に於て二四・九點を得てゐる。故に年長者は合格者に於て〇・四點優秀なることを示し、不合格者に於て三・二點優秀である。更に年長者は合格、不合格を通じ檢査人員七一人、その總得點二一四二點平均得點三〇・一七である。しかし年少者は檢定人員八六人その總得點二三五一點、平均得點二七・三六である。故に年長者の平均得點は年少者の平均得點よりも二・八一點も多く、遙に精神發達程度の優秀なることを示すのである。

幼稚園の人としての醫學博士竹村一氏

膳　眞　規　子

回顧すれば今より二十年程前の事で、大阪醫大の制服を着た學生の方が、大阪江戸堀幼稚園を參觀に來て下さつて、私の最も力を入れて居りました點を着眼して、幼兒の體格が非常に良く元氣で有ると喜んで歸られました。二三日を經て又參觀に來られ、今日は幼兒等と暫時一緒に遊ばせて下さいと言ふて、春日和の暖き庭園で砂遊びして居る幼兒の仲間に入りて大なる山又はトンネルなどを作る手傳をせられて、幼兒と共に樂しげに遊ばれました。

又二三日を經て來園、今日は十一時で學校が休みですので、幼兒と一緒に中食させて下さいと辨當を持參せられました。園では此時間は毎日男女四人の幼兒の當番が、保姆監督の下に充分室内を清潔にし机の上に一輪草花又は小盆栽物を排べて成るべく綺麗に裝飾し、最も氣持よく靜かにゆるゆると咀嚼して中食するのを常として居ました。氏も此仲間の一員として樂しく興味ある食事をなされました、又或日學校の歸りに園長さんに御依賴の件があるからと申されて面會を求められたのでお逢ひしました處、これから時々學校の歸りに參觀させてもらひたいと乞はれました、私はこれに答へて專心醫學を勉强なさいませ卒業の上幼兒教育を研究なさいましと申しました處、氏は私の

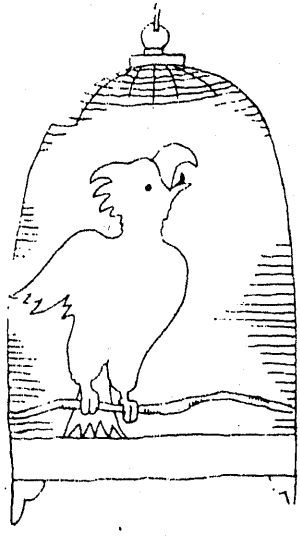
父は醫者でありましたが早く死去し母一人の手に成長し中學を卒へ、性來の子供好きで教育者にならんと志しましたが、私の希望に一人の同情者もなく終にいやいやながら、醫學の勉强をする事になりました、然し此希望は今日もなほ捨てないで暇さへあれば、中之島の圖書館に通ひ新刊の心理學や教育學に關する書を讀んで慰めて居りますので。今後幼稚園にて親しく幼兒に接觸して實際の研究を致したいからお許が願ひたいと熱望されました。私は其熱望を拒み兼ねて其需めに應じました。併し其時私は氏を戒めて若き時は熱する事强きも冷却する事も早いものである、熟考せられてはと申しました處、氏は私の將來を末永く見て居て下さいと答へられました。

爾來暇ある時は來園され圖書館其他に於ての新刊によれる學理に基き幼稚園の爲め衛生上保育上に付き幾多の、注意と知識とを與へられ利益を受くる事尠からざりし。時に教育大家の講演にて最も斬新として陳べられた學說も、私共は疾くに氏の講義によつて知り居るなど如何に氏の頭腦の卓越せしかを驚き又敬服しました、斯の如き氏の講義を唯江戸堀幼稚園の者のみ聽く事の、勿體なくと考へて西區內幼稚園の者のみ聽く事の、勿體なくと考へて西區內幼稚園は申迄もなく他區の幼稚園の人々にも傳へて一週一回之れを聽きました。即ち之れを江戸堀研究會と稱へました。此日には遠く岸和田堺市などから來會せられ時には五十名にもなつた事がありました、氏が日本で誰も未だ公開講義せられなかつたアウトウッド女史の「幼稚園の原理と實際」の連續講義をされましたのも此時でありました（此時代に教を受けた人々は今尙其恩を感謝して喜んで居られます）

其後氏は中等教員の心理學教育？の檢定に合格して其資格を得られ、大阪府の學校衛生に大阪市の兒童相談に更に樟蔭高等女學校同女子專門學校

に兒童學を講ぜられ在職されて、ますます兒童研究をつづけて居られたが、昭和元年から再び大阪醫大に研究生として入學、石原博士に從ひ一層兒童研究をつまれました、其研究の効を奏し、昨年十一月幼兒學童の衛生に付ての論文によつて醫學博士の學位を受領せられました。舊冬十二月八日京阪神の知名の士女幼稚園關係者等によつて、盛大なる祝賀會が擧げられました。

以上氏の學生時代より知れる私として、其昔の追懷のまゝを記るして同氏の光榮を幼稚園の關係諸氏にわかちたいと思ひ、序ながら氏に請ひて左の幼兒教育に關する記事を本誌に掲載する事といたしました。



幼稚園衛生の特色

醫學博士　竹村　一

學校衛生とは「衛生學の一分科であつて學校なる環境内に生活する學童及教師の健康を保全し且之が增進を圖るものである」が幼稚園衛生も云ふ迄なく學校衛生の一部分であるが、私は之を學校衛生より離して別に幼稚園衛生と云ふものを提唱したいと思ふものである。

從來から學校衛生は時に教育と云ふ主體と離して特別の事實として取扱はれてゐる傾向がある。然し學校衛生なるものは必ず教育と云ふ事が主體であつて、其副體として存在するものである。或論者は教育と云ふ範圍の一部分であると云ふが、私はその論者には贊成し兼るものである。即主體の孰れの部分にも必副ふた處のものであつて、學童の教育には孰れの處を切り取るも必そこには學校衛生と云ふものが存在すべきであると思ふ。之は要するに心身の教育と云ふ事が教育の對象である以上明白な事實である。

さて幼稚園衛生は更に斯うした學校衛生に對する考へ方を一歩進めて深く調べてみなければならぬ。

幼稚園に於ける幼兒の生活は學校に於ける學童の生活とは多分に異つた處がある。例へば學校では一ヶ年間に定められた學課の時間的配當がある。或幼稚園では一ヶ年の保育細目を設けて然も毎日の時間割を作つてそれに從つて學校式にやつておる處もあるかも知れないが、然し私の考へて

おる幼稚園と云ふものはそんなものでないと思ふ。日々が遊戯の生活であり現在がその幼兒に對する最も尊重さるべき教育の時間であり、又幼兒の要求を充たすべき時間であると思ふ。一ヶ年に終了すべき細目の必要もなければ一日を必四十分宛保育室に追ひ込む必要もなく、唯子供らしき生活をさせその伸びるべき善き芽をのばせれば足れるのではないかと思ふ。だから教材の分配も教材の進度もなければ、その幼稚園に於ける全生活が知情意すべての全人的な教育時である。ここに於て私は幼稚園には別に教授衛生もなければ時間割に對する配當の心配もないと思ふ。

次に學校では體操の時間、算術の時間、讀方の時間・修身の時間と云ふ樣に稍知育德育體育と云ふ樣に判然とは云ひ難いが多少區分されておる。

前者を教材に對する量的考察とするならば之は教材に對する質的考察とも云へよう。幼稚園には此質的區分を考へる事は出來ん。勿論文部省令で觀察談話等々と區分はされておるが、然しすべては幼兒の遊びとして取扱はるる事で換言すれば幼兒の生活として取扱ふ事で之を各項目に判然と區劃して考へる時には私は幼稚園教育の生命がなくなると思ふ。

更に幼稚園は學校よりも一層家庭との連絡を必要とするものである。その點に於ては母の爲の家庭衛生と一層の協力が必要である。

右の樣な點を考へて來ると學校衛生と幼稚園衛生とは種々の差異を見出して來るものである。

そこで私は幼稚園には幼稚園獨特の衛生を考へたいと思つておる。即幼稚園に於ける全生活を保健的に體育的に衛生教育的に衛生監督的に立案計畫したいと思つておる。

衛生と云ふ事が生活から離れて考へられる時に何の初果もない。私が立案した動的學校衛生と云ふものは要するに此點に付て從來の靜的な考へ方を一變して新しい方向を提唱したつもりである。

此動的な考へ方は最も幼稚園衛生に適用されるものであると思つておる。

幼兒の喜び歌ふ歌（四）

葛原しげる

○

小さき鯉に麩をやれば
大よろこびで　寄つて來て
　皆で　パク〳〵　つゝきます

つゝいて見ても　たべられぬ
麩は大きくて　たべられぬ
　皆で泡を　吹くばかり

これが初期で、後期のは、第二節の末行を、

　皆で　ぶくぶく泡ばかり

としました。更に、此の歌詞の面白味を十三絃の箏曲にも入れたいとあつて、盲作曲家宮城道雄君のために、曲趣が面白く殘るやうに、各節の末行を

　皆でつゝく　パクパクパク
　皆の泡が　ブクブクブク

としました。

どちらが幼兒に喜ばれませうか、

更に曲ですが、「大よろこびで」を、もとは「ミミレドソーミド」とありましたのを、作曲者は、非常な熱心で、「ミファソラソミドト」と變へられました。いかにもその方が、自然であり、大悦びの色も、よく現はれるやうです。

○

三十年昔の中學一年生の私は、英語が分らなくて、困りましたが、教科書であつたナショナルリーダーは、その繪も善くて、後には大好きになりました。その中に、幾つか、只口調の面白さで、暗誦したレッスンがあります。その一つは「ジャックの作つた船」でした。疊みかける句の面白さは、日本でも、「尻取り」文句などとしてコドモ界を賑はしますが、それを試みたのが、「お船」です今、おもふと、「お船」といふよりは、「帆かけぶねの旗」になつてゐますが、

お池に浮べた帆かけ船
帆は眞白で　帆ばしらに
日本の旗が　ヒイラヒラ
日本の旗は　日の丸よ
水にうつつて　キイラキラ

として、靜中動を見つけました。

一體、幼兒が美しさを感じ、また勇ましさを感じますのは、大人とは、ずゐ分違ひます。

白地に赤く　日の丸そめて
あゝ美しや
日本の旗は

は、まだ美しく、幼兒にも見えませうが

のぼる朝日の　勢みせて

といつたところで、あれが、朝日の昇る勢を見せてゐると、どうして、幼兒に、直感されませうか。

ヒラ〳〵動いてゐるのに、旭の光でも強く射しそふ時ならば、いざ。

「おきあがりこぼし」にしましても、

あちらを向いて　だまつて座る

といふ面白さは、大人の面白さであつて、コドモの爲には、自分の方を向いて座つてくれるのでなくては、面白くも可笑しくもないのです。

かくて、この「お船」の旗は、動いてゐる事に

したのでした。

ヒイラヒラ
キイラキラ

この澄んだ聲にも、快感はありませう。

○

前出の擬聲の悦びは、幼兒には、いつも大きいものがあります。それだけ、取扱上敏感でなくてはなりません。

蟬の啼聲には、いろ〳〵ありますが、代表的のものとして、

ミンミン
カナカナ

の二つを取入れて「蟬」を作りました。そして、その擬聲は、二節の同じ位置において、ミン〳〵の曲で、カナ〳〵を歌ふ事にしましたところ、教えて見、歌つて見て、

ミーンミン

は善いとして、その曲による

カーナカナ

の間拔け樣がひどいので、思ひ切つてその曲で、早口になつてしまふのですが、「カナ」を七つにして、

カナ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵

と歌ふ事にしましたところ、大そう、よく啼く蟬になりました。「カアナカナ」とさへ歌はれる蟬はねむさうでもありましたが、カナ〳〵……と七回も早口に啼く時、如何にも胸のすく氣持がするのでした。（以上「大正幼年唱歌」第二集）

動くもの、動くこと、その何でもが好きなコドモの歌に、汽車の歌はあつても、電車のがなく、飛行機のがなくて、非常に淋しいと感じたのが二十余年前、私が兒童唱歌を創作する氣になつた動機の一つでしたから、動的のものを、もとめて作歌しました。

飛行船が、日本で飛んだのは、東京では、大正二三年頃の大問題でした。その時の所見をそのまま歌にしたのが、

唸りをたて〳〵　青空に
浮んで進むよ　飛行船
つるした船に　人がゐる
人が帽子を振つてゐる
下を見ながら振つてゐる
萬歳　萬歳　飛行船

でした。この

浮んで進むよ

は、全く、苦心したのです、浮んで、そして進むのです。その一つだけでは、飛行船でなくなります。それと、

萬歳　萬歳　飛行船

の句は、スケッチです、實際、都の人では、大人まで、上を向いて、さういふ氣持になりました。悠々と、青空に唸りをたてゝ浮んで進む美姿を見るや、誰も彼も、氣が大きくなるやうで、心から叫びたくなるのでした。あの時、船の中の人が、帽子を振つてゐた平和な、ゆとりのある心を、悦びます。

所が、それは、二十年もの昔のこと、その爲、それほど珍らしくなくなつた飛行船をば、皆、亢奮なしに見る事が出來るやうになりました。大袈裟にいはなくてすむ樣になりました。船が吊してある事もいふ必要がなくなりました。中の人も、帽子を振る必要のない程、地上の人も、騒がなくなりました、かくて、此の歌の改作を必要として、また作曲者と、いろ〳〵に歌ひ試みつゝ、曲は原作のまゝにして、しかも二節のものにしてしまつたのでした。

唸りをたてゝ青空に

浮んで進むよ飛行船
大空高く　ゆらゆらと
旭の光に　勇ましく
都の空へと進みゆく
萬歳　萬歳　飛行船

唸りをたてゝ青空に
浮んで進むよ飛行船
大空高く　ゆら〳〵と
夕日をあびては　嬉しげに
田舎の空へと進みゆく
萬歳　萬歳　飛行船

第二節は、

田舎の空へと　歸り行く

の方が、本當であり、また、詩としても、コドモにも分り易い形式美もあるのではないかとも考へられたし、また、

ゆら〳〵と

は、少し、特殊すぎるのではないかと、案じましたけれど。

○

幼兒には、所有慾が熾であり、それが自然ですから、「運動會の朝」の歌の第二節に

今日は　うれしい運動會
鈴割　綱引　軍艦あそび
私が勝つて來るやうに、
皆で　見に來て下さいよ、

としましたところ、作曲者は、教へて見て何となく、氣が引けるからとて、この第三行目を

私の組が　勝つやうに

と、複數にして、その難から逃れて、ほつとしてゐます。

○

幼稚園や小學校に備付の器具、または公園など

の運動具などに對してあまりに無頓着に大きくなるコドモのために、とて、「腰掛」の歌曲をものする事になつたのは善いとして、震災前のでは

遊戯や唱歌で疲れたら
いつでも　こちらへ腰かけて
お休みなさいと　言ひたいやうに
ならんでゐるのは　腰かけよ
まだ〳〵疲れぬ　くたびれぬ
けれども　お稽古すんだなら
皆で　ならんで　お休みしませう
待つてゝください　腰かけよ

として公にしたのですが、何だか、あまり、これを作る動機が見えすいてゐて、大に、嫌味も感じましたので、第二節は、まだ疲れないなどと、ゐばらないで、腰掛の目的そのまゝに、腰を掛ける事にしました。その方が、自然でもありますから、そしで、その序に第一節を改作して

遊戯や唱歌で疲れたら
いつでもこちらへ腰かけて
お休みなさいと此方を向ひて
皆を待つてる腰かけよ
やれ〳〵疲れた　くたびれた
楽しいお稽古　すみました
皆で仲よく　お休みしませう
ほんとに氣持の善いことよ

これで、腰掛も嬉しい事でせう。折角、腰掛があるのに、人間の子は、ゐばりちらして

まだ〳〵疲れぬ　くたびれぬ

といひ、しかも、「けれどもお稽古がすんだら皆で並んでお休みするから、それまで、そこで、おとなしく、だまつてまつてろ、」といはぬばかりの舊作では、腰掛も浮ばれないといふものです。呵々

（以上「大正幼年唱歌」第三集）

幼な心へのお話について

大塚喜一

一、お話の中の童心の動きに共感し共鳴せよ

日本幼稚園協會編纂の「幼兒の樂しむお話」は、その序文の中に「このお話は、お茶の水幼稚園でお話をされてゐる間に、實際幼兒を樂しませる事の出來たものを集めたのである。」と記されてある。然るに其中のいくつかのお話は、初めて讀む者をして、何だかたよりない樣な物足りない樣な感を起させる事がある。明日は子供たちへお話をするといふ喜ばしい希望の中にも何となく不安と責任感とを抱きつゝお話集を讀んでゐる時、若し斯樣な感を起すならばそれは、お話の中の童心の動き——例へば無邪氣な喜び、好奇心的な輕い驚き、リヅムの快味等——に充分に共鳴する事が出來ないからで、斯かる味を味はずに只一寸讀んだだけの記憶を思ひ出しながら話したのでは、折角の好き話材も其効果の大半を失ふであらう。然らば、どうすれば斯かる童心の動きに共鳴する事が出來るかといふに、常に幼兒と共に遊ぶ間にこまやかな同情を以て彼等と精神生活を共にする事、殊に幼兒から話しかける個人的な對話を心をこめて聽きつゝその中に動く幼な心に共鳴するやうに心がけるべきである。幼稚園の朝の時間は實に斯うした人間的相互生活をなすべき絶好の機會であ

つて、その日の保育の生命はこゝに其源を發してゐる。幼兒達は、毎日新しく地上に生れて來た樣な新鮮な潑溂たる感觸を以て其感覺に入り來る萬象に直接してゐる。幼な心に話しかけんとする者はこうたした幼兒の態度から學ぶところが無げればならぬ。日本童話聯盟主事松美先生は「見るものきくものからお話が湧くといふやうになつてこそ、始めて幼稚園の先生である、低學年の先生である。可愛いゝ子供の母親である」(話方研究第四卷第四號)と云つてゐられるが、幼兒の如き心を以て環境に接するならば、お話の材料は自然に潤澤に我等の心に入り來るであらう。

二、幼兒の好きなお話を何回も繰返して話せ

倉橋先生は「幼稚園に於けるお話の目的は幼兒をして幼兒の世界に住ましめる事である。」と云はれた。前に述べたる如き童心の動きがお話によつて呼び起された時、幼兒達は己が魂の故郷(ユートピア)に遊ぶ樂しさを味ふ。一度此の樂しさを味へば、其後此お話は幼兒の心に抱く大切な寶となり、幼兒は其お話をした先生に再三再四之を聽かせて呉れとせがむやうになる。此際幼兒の要求する所は、最初に保姆の心の中から流れ出て幼兒の世界を展開させた「お話」そのものであつて、決して書物に書かれた「童話」ではない事を特に注意すべきである。幼兒達は初めて此お話に耳を傾けた時の感激を再び新しく味ひたいと願つてゐるのであるから、話す者は最初のお話の時の心持と之に伴ふ音聲態度等を再び生かして話すべきである。詳しく云へば、話す者はお話の中の一々の光景を一回毎に次第に鮮明に自己の心眼に映せしめ、且是等の中のいろ〳〵な心の働き殊に情緒の動きを一回毎に益々如實に眞劍に自己の心の動きとして實感しつゝ話して行くのである。お話の音

聲や態度等は實にこうした內面的理解の中から自然に產み出さるべきものであつて。上品な單純な態度の特質はお話を自己のものにした努力によつて得られる。同じ童話が斯くして一回毎に洗練せられたる「お話」として進展して行くのであつて、此處に幼兒と保姆とが互に心の握手を交して進み行く境地が開かれて來るのである。前述の過程を經て反復精練せられたるお話に於ては、其光景の映像と其情緒の躍動とは話者の心に動くと共に幼兒の心にも動き、兩者の共感共鳴の斯くして熟する時、話す事と聽く事とに相互に全我を沒入し來りて、此處に兩者の相對的な差別が「お話」そのものゝ中に融合せられて此處に自他の人格を合一せる絕對境に入る。其深淺の度は時と處と人とに依て異るであらうが、眞劍な努力によつて達し得らるべき境地である。此三昧の妙境より我に歸りて靜に內觀し反省すれば、自分と共にお話の世界に遊んだ幼き魂の姿が鮮明に自己の心に映じて來る。自分の努力の足らざるに比し、幼な心が何と熱心にお話に聽き入つてゐることよ！自分にお話を求めてゐる幼兒の純眞な信賴性に感激する時、絕えず斯道に精進せずには居られない內なる心の力を與へられるのである。

結語　人間教育としてのおはなし

幼兒の世界に現はるゝ人間的な又は人間としての生活感が即ち「幼な心へのお話」を形成するのであらうと思はれる。幼兒は人間を求めてゐる。人間を方便として道具としてではなく、あらゆる功利心を離れて直接の人間交渉を求めてゐる。故に、親や先生と幼兒との相互生活の中から開けて來る人間交渉は保育の最も純なるものであらうが、只我々が大人であるが爲に幼兒の心にピッタリと來ない所のあるのも亦止むを得ない事かも知れぬ。幼兒は「お母さん」や「先生」その人に大

間交渉を求めて來るが、大人としての心の働きの或る方面が（時としては、教育の名に於て我々が幼兒に對するが爲に働く心の或る方面が）この元來が純眞自然なるべき人間交渉の情景の中に幼兒の心に通じ難く解され難き何ものかを混入させはすまいか？さりとて專門的な上手なお話は、お話そのものを樂しみ得るが、それは或特殊な珍らしい心の御馳走として折々味ふべきものであつて、人間味に於ては却て薄い憾がある。茲に於てか、幼兒が人間交渉を求めてゐる保姆その人が、幼兒の世界の言葉と態度とを以て彼等に話しかけて來た時、幼兒達はどんなに喜ぶであらうか。これこそ正しく、お話と人間性との兩方面の要求を一體として心ゆくまで滿して呉れる幼な心の滋味である。更に切言すれば、幼兒の人間性をその知情意未分の具體生活に於て、即ち人間への內熟を其本源に於て培ふべき心の糧として「幼な心へのお話」が爲されるべきである。基本教育の此見地から吾人は大切な原則を學ばねばならぬ。お話の構成要素として體驗的なるものを撰ぶべき事、發音の正確なると共に完全なる感情の表現を伴はせるべき事等は其代表的なるものである。（詳細は日本童話聯盟發行話方研究第四卷第一、二號に就て知られたし）斯く考へ來れば、初に「童心の動き」として述べたる所にこそ、人間教育の尊き素材が吾人に教へつゝ吾人に培育さるゝを待つてゐる事に思ひ到るのである。お話といふ保育の方法を用ひつゝも、其方法を產みし原理に立脚し其精神を生かして、幼な心と共に動きつゝその生育する本源に於て人間本然の自己を見出す。これこそ幼な心にお話する者の最も眞摯なる態度であつて、保姆と幼兒とが親しき心の握手を交して人間教育の眞實性に生くるの道も亦斯くして開かれて來るのであらう。

（二五九一・二・二〇）

二月號「保育といふこと」誤字訂正

頁	段	行目	誤	正
三四	下	八	持徴	特徴
三七	上	一三	現像	想像
同	下	六	具體的に	具體的な

同上參照事項

處女の母性愛について

g. Stanley Hall, Adolescence（スタンレー、ホール原著、元良博士外三氏譯青年期の研究六五三頁）に曰く「アウグスチン Augstin 氏が「人の靈魂は神のために作らるゝものにして、神の中に安息を發見する迄は幸福なる事能はず」と云へるが如く婦人の身體と精神とは母たることのために作られたるものにして、母たる事能はざれば到底眞の安息を得る事能はず。吾人が婦人の精神に就て理解するに隨ふて漸く明白に、婦人の精神は意識的又は無意識的に此方向に向へる事を知るべし。婦人の性質は先づ愛の對象として兒童を要求するものにして、次で彼等をして此職分を履行せしむる爲、彼等に元氣と保護とを與ふる男子を要求するものなり。此二つの者は婦人の生活を完全にするものにして、是無かりせば其生活は到底圓滿なる事能はず、其運命も亦其奥底に於て多少の缺陷を免れざるべし。凡て成熟せる健康なる女らしき女は必ずや上述のものを要求すべく、是を得る事遲き者は遂に臍を嚙むの悔を殘すべし。是無くんば完全なる幸福は到底生ずるに由なく、其他の滿足は畢竟空想に過ぎず。故に理想的社會にありては婦人の教育は良妻賢母を中心とせざるべからず」と。

母となつた最初の日から母たることの尊き使命を全うして天與の惠福を享受せんとせば、母となる前の生活即ち處女時代の生活が、ホール氏の云へる如き純眞健實なるものでなければならぬ。

玉成幼稚園參觀の記

氏原鋹

玉成幼稚園は、ソフヤ、アラベル、アルウキン先生の經營せらるる幼稚園で、東京市外高井戸町にありて、保姆養成所を併置す。其敷地廣く其建物質素堅實に其築材の精選なる其構造の入念なる其建築に七萬餘圓を費やされたるものにて、園舍のしつかりとして立派なるは他に於て多く見ざる處なり。

其廣き遊戯室を兼ねたる保育室の周圍に廣き廊下ありて之れに硝子障子を廻らし、其前庭は廣き芝生中に花壇や大小の樹木あり、表側は二階建て楷下は應接室保育室にして、楷上は保姆養成所の教室となる。遊戯室の後側は先生の居室にして、中に日本室の一を設けられ最も優佳の裝置になる。之れ先生の如何に日本趣味を有せらるる事の之れのみに止まらず。幼兒保育の上に又保姆養成所の方針の上に付き、我國風に適應せんとして日夜考慮せらるる事の淺からざるものあり、全園各室内の光線のよく透明なる誠に氣持よき感あり。

本園創立以來滿十五年を經最初は東京市内にありしも昭和二年此地に新築せられて移られたるものなり、アルウイン先生は幼時より勉學の念深く殊に幼兒教育に付ては、其實際と理論の研究に伊太利のモンテツソリー先生の學校に學ばれ、之れを我國の幼兒教育上に適せざるものは省きて選擇

し實施せらるる者にて、又フレーベル氏の恩物をも使用せらる。茲にアルウイン先生のモンテッソリ先生式の保育を參觀するを得たれば左に記るす

幼兒の、感覺練習保育にて、其幼兒の使用する感覺練習用玩具の種類も多からんも私の觀たる物は、視覺に關するもの、聽覺に關するもの、觸覺に關するもの手先きの練習に關するもの等にて、之れ等の用具は各幼兒の同一の物を使用せず、或兒は聽覺の練習用具を或兒は聽覺の練習用具を使用して倦む色なく、最も靜かに練習す、其一を使用し終れば他の用具を保育者の手によらずして、幼兒自ら棚より欲する用具を取り來て自己の机上に置きて使用す。例へば、聽覺に關する練習用具を使用し終れば之れを棚の上に正しく治めて、自分の使用せんとする視覺用具を取りて使用するものなり。斯く保育者にことわる事なく、自由に我好む物を選びて使用す。

此感覺練習には專ら幼兒の注意力を集中するものなるにより、室內は極めて靜肅を要し保育者幼兒間又幼兒相互間の言語も極低聲に殆んど無言の狀態にて、其注意作用を妨げず亂さゞる樣になされたり、依て參觀人は許されざる事なれど、特別の厚意を以て私共姉妹は之れを許るされたる事は實に幸なりし。

其幼兒の感覺練習の狀況の概要を左に陳ぶ。

觸覺練習　板の圓形方形長方形等を、一の薄き箱の中に其形をはめ込むに、盲想作用即ち手拭にて目かくしをして、手先きで、板の形狀を觸覺してはめ込むものなり。

視覺練習　三原色三間色の糸卷樣の物を、其濃き色よりだんだんと淡き色を順次に机上に排列するものにて終に近付く三四番目の色の區別即ちうすき色に至りては稍注意を深からしむるものの如し。又視覺練習として、形狀の比較に方圓三角

形（直角正三角形不等邊三角）五角六角等の形狀を厚紙に印刷したる物を排べ此原圖に對し其下方に其輪廓を太き線にて印せしものより漸次に細き線に至る圖を排べしめて對照するもの。

聽覺練習には、約三寸程の木製の圓柱を振り動かしカラカラと音をなす物を數個を與へて、之れを振りて其音の大小强弱又は音なき物を分類して、之れを順次に排列し音をききわけるもの。

手先即ち指の練習には、約一尺程のわくに布をはり其中央をあけ其兩方より約一寸巾の赤きリボン十二個連ねてつけ此リボンを以て結び方の練習をなすもので此六組のリボンを蝶結びに或は解き或は結びて練習をなすもの。又之れと同樣のものでわくの中央に一方ボタン一方穴を連ねたるものを以てボタンのかけはずしをなして指頭の練習に又わくの中央双方交互にボタンを付け之れに紐をかけ連ね或ははづして練習をなす。

以上此練習の幼兒に對しては其注意力の優劣如何に付て採點記入して置かれたり、此時間終りし後アルウキン先生の言はるるに此感覺練習には、フレートベル式恩物にてはドーシテモ出來難くして モンテッソリー式によるものなりと。

右の如くモンテッソリー式恩物による保育は豫て聞き居りしも之れを實視するは初めてにて大に感ずる處あり、之れは讀者諸氏の中にば既に御存じの方あらんも以上參觀の狀況を記す。

抑幼兒に感覺練習と言ふ事は必要の保育事項で又幼兒は之れの成績に對して一種の興味を有するものなれど、玉成幼稚園の如きモンテッソリー式器具なければ之れを行ふ事不可能なれど、昔時在職中極不完全な之に類似の保育をなせし事の一二を陳べんに、大きな入れ物の中に方形長方形三角形等の木片や石貝又はゴム製毬ゴム製動物其他の物を入れ之れを幼兒に手拭で目かくしするか目を

閉ぢさして其物品を取らしめ、之れを觸覺させて其物名を言ひ當て、又一幼兒を目かくして他の幼兒の交るがはる其幼兒のそばに行きて、其名を呼び其聲をききて誰なるかを聞きしり當てゝ當てられし幼兒が代りて目かくし兒となる遊をなせし。此遊びには歌を用ゐてなす事もあり、今其遊戲唱歌の譜を（此の唱歌は今より五十餘年前に獨逸に於て使用せる盲想遊戲の唱歌を譯して當時のお茶の水幼稚園保姆豐田英雄先生が作歌せられて宮內省式部寮の五等伶人奧行葉氏の撰譜せられしものなり）今日使用の西洋音譜にて記るしましたから何卒樂器で御彈きなさいまして其如何なるものなるかを御試みありたし。

唱歌盲想遊戲用

うたまひに　たちつとひたる　たはむれの
めしひのきみよ　ともとちの　うたふまに
まに　そかなかの　ひとりがこゑを　みみと
くも　それとききしり　こころあての　その
なたがへす　ささはささなん

盲想　二調

6ツ 6タ 5マ 3ヒ	2ニ —	3タ 3チ 5ツ 5ド	6ヒ 5タ 5ル
3タ 3ハ 5ム 5レ	6ノ —	6メ 6シ 7ヒ 7ノ	6キ 5ミ 3ヨ
3ト 3モ 1ト 1チ	2ノ —	1̇ウ 2̇タ 2̇フ	6マ 6ニ 5マ 5ニ
3ソ 3ガ 5ナ 3カ	2ノ —	6̣ヒ 6̣ト 7̣リ 7̣ガ	6̣コ 6̣ヱ 5̣ヲ
1ミ 1ミ 1ト 1ク	2モ —	2̇ツ 1̇レ 1̇ト	2̇キ 2̇キ 7シ 7リ
6コ 5コ 7ロ	6ア 6テ 5ノ	3ソ 5ノ 5ナ	6タ 6ガ 5ヘ 5ズ
3サ 5サ 5バ	6サ 5サ 3ー	2ナ 1ー	2ン —

保姆の顔

坂内ミツ

フレーベル館のタイムスに倉橋先生の御話「幼兒の顔」といふのが卷頭にありました。其最後に「さて幼兒は私どもの顔をどう見るか」に至つて私の眼は紙面にこびりついた。そうして今も其言葉を心の中に繰り返して居る。今更顔の造作を換へて貰いたいと願つても叶はぬ相談、せめて心の平和によつて恐は氣な眼もおだやかに、心の笑によつてこわばつた顔にも愛嬌のあるやうに、心のうるほひによつて高い鼻も低く見て貰うより外はない。幸にも幼兒は其造作を見ようとはせず、心持ちを見るので大人の觀方とは大に違うのであると、獨りきめにして自ち慰めて居つた。實際家庭の惑配も社會の出來事より受ぐる影響も幼兒の顔を見るとすべて姿を消し、たゞ〳〵幼兒の顔のみでいつぱいであるのは保姆の幸福なる第一である。

處が困つた事件が突發した。それは小學校檢定の發表の日である。第一番に發表になつたのは大塚である五人に一人合格の割合であるから不合格者のない筈はない。其合格者と不合格者の母親が同時に幼兒の居る時間中に訪問される事である。狹い幼稚園では應接室として一室も二室もとつておくわけに行かない。扨て一方の母親には御芽出度うと挨拶してニコ〳〵せねばならぬ。實際自分もうれしい處が一方の母親に對してはお氣の毒でたまらない。殊に自分が自信して居た幼兒のおちた場合涙なしには居られぬ。殊に自分が同じ位の年齡の子を持つて居る母として、不合格の悲運に泣いた經驗を持つて居る身には同情せずに居られようか。一年も二年も目をはなさず、觀察もし、育てもしたあの個性を充分發揮するひまもなく、僅

か三分の檢定によつてかくも親と子を不幸にしたか（大きい意味では幸福かも知れぬが）と思ふと泣かずに居られない。先生に申譯ない事になりましたと詫びられるのは不平を訴へられるよりも尙つらい。さてこの顏を幼兒は何と見るであらう。

合格した兒と不合格な子と手をとり合つて遊んで居る時、保姆の顏を見て先生僕おつこちちやつたと飛びついて來る幼兒を抱き上げて、頰ずりする內にも眼はうるさぬかと氣づかはれる。一方合格した兒に御芽出度うといふにもあたりを憚らねばならぬが、同時に保姆の喜ぶ眞劍味を味はせ度い感情に走るのは惡いか冷淡と思はせるのは尙惡い。そうして尙慢心を起させぬやうにせねばならぬ。此內心の苦勞は自然面にあらはれる。如何に平靜を裝うても鋭い幼兒は見ぬきはせぬかさてこの顏を幼兒はどう見るであらう。

次ぎ〳〵と發表の日は來る。十校に近い發表の時毎にこの四つの心がこんがらかる。この心を充分に先方に通じ得てしかも平靜であらねばならぬあゝむづかしいものは保姆の顏である。

幼稚園の園藝として栽培し易き「マガレット」に付て

在鎌倉　膳　眞規子

幼兒教育の上に、園藝の最も興味深くして有益なる事は今更申述ぶる必要は御座いませんが、最初に興味なき者も一度これを實行して手がけます時は、其自然の發育狀態を見て興味を持つ樣になり、先づ一粒の種が發芽してこれがよく發成し蕾をもち開花し實の一つも結ぶ樣になりました時の喜びは、とてもとても愉快なもので御座います。又一本の草花でも我園にて手がけて培養したものは殊に嬉しく感ぜられます。花瓶にさし入れても樂しみ深く、優良なる感情に咽びます。斯くして度々此樣な場合を繰り返します事より、幼兒の心も知らず識らず、自然の偉大なる教訓を感じ、一本の草花も愛情を以てよく世話をいたします事は、實際幼兒と一緒に園藝をいたして居ります都度目擊いたします事で、涙ぐまるゝ迄に感じさせられますので御座います。

此園藝をいたしますも幼兒本位にいたします事として成るべく栽培し易きものを選び、要するに培養し易く花も持ち易く其上花時期の長きものを用ひんと種々試みました中で、一番世話のなし易くして花時の長き「マガレット」を選びました。

私は大都市の最も園の設備も又庭園も不充分な園に長く居りましたので、一層此園藝の必要を感じまして隨分苦心努力をいたしましたが、此努力の甲斐が御座いましてよく發育いたしました時の愉快さは今尙忘れる事が出來ません。

明治二十一年の一月の中旬頃、幼兒の家より溫室で培養せられた「マガレット」の五寸鉢に植ゑて蕾が七八ツ出來て居りますものを戴きましたが其頃此名がわかりませんので尋ねましたら「マガレ

ツド」と教へて下さいました。寒中の花の少なき時で御座いますので、本當に嬉しく存じまして幼兒と共に氣持よく眺めて居りました。一月の末頃には蕾がだんだんと開いて來まして、二月の上旬には悉皆咲き揃ひまして美しく、此蕾が開きます毎に、幼兒は又咲いたさいたと興味を以て見て居ります。

三月の中旬頃には最早花壇におろしてもよきとの事で、咲き揃ひました花は全部切り花にして狹き花壇に移植いたしました。此移植の成績は如何と思ひましたが、一週間程は餘程衰へて居りましたが、十日程經ますと日增に元氣になつて來まして、四月の上旬頃には葉の許より新芽が澤山出て來て僅の間に非常に成長いたしまして、其新芽には何れも多くの蕾が見えて參りまして、四月の末には花盛りになりました。花は切り花として食卓上や室の裝飾にいたしまして、なかなか美しい事で御座いました。花は切ります程新芽が出まして其處に蕾を持ち次へ次へと咲き出します。五月六月最も盛に咲き出て、七月の中頃より花の軸も漸く短くなり又花も少なくなり、八月は殆んど花なく、次第に枝が蔓りまして其葉が又青々として美しきもので御座います。九月になりましてから少しく花が咲き出でましたが、春の樣には咲きません。併し幹はだん〳〵と繁茂しまして、新芽が立派に出て參りました。

秋の彼岸前にこれをさし芽する事がよいと教へてもらひまして、新芽を上より二三寸の處より斜によく切れる剪刀で切り、砂を入れた箱又は鉢にさします。斯くして二三日は日陰に置いて水をかけ、其後はあまり日光の强くなき場處に毎日水をよくかけて二週間いたしますと白き根が出來てたやすく育ちます。寒氣を恐れます草花で御座いますから成るべく霜のかからぬ處藁を覆としておくか、フレーム又は溫室又は南受けの椽の下に入れて時々暖き日に水をやり斯くして、三月の初頃に又花壇又は庭園に出して栽培いたします。

一本の親木よりさし芽が七八十本より百本位は

たやすく採れます繁植多き世話のかからぬ草花で御座います。「此マガレット」は花白く高尚で葉も美しく開花期長く、溫室なれば年中咲いて居ります。さし芽のものは三月頃より四五六七月位までよく咲き、花を切れば次へ次へと新芽から枝が出て蕾をもち、都市幼稚園の園藝として誠に適切のもので御座います。在職中は趣味を共にする知人又は幼兒の家庭へも隨分と分配いたし、又引退後は嵯峨の宅へも持ち歸り自分の花壇は申迄もなく本家又は隣の花壇へも移して何れもよく發育いたしまして花時には其庭園の一隅を立派に飾つて居ります。

昨年より由比ヶ濱のほとりに參つて居りますが海岸の事とて庭園凡て砂地、近くの草花屋より小さき挿芽の三寸鉢植の「マガレット」を求めてこれには四五輪の蕾を持つて居りました。最初は室内で眺めて居りました。三月の初めに花壇に降しました。四月頃よりメキメキとよく發育して來て澤山な蕾を持ちてなかなか立派に育つて參りました。五六七八月は實に美事に花が咲き揃ひまして、毎日毎日切り花にいたしまして東京の宅へも持つて參りました唯一本の親木で地質のよく適したものと見え實によく發育いたしました。次に九月の彼岸前によき芽を切りて、古き箱や鉢に百數十本さし芽して、箱の分は椽ノ下鉢の分は溫室に入れて置きましたが、兩方共に寒氣に堪えまして青々として立派に發育して居ります。溫室の分は何れも蕾が出て來ました。椽の下の分も固き蕾を持つて來ました。春の彼岸前後には花壇又は庭園の諸處に移植いたしまして、花咲く頃には家人と共に觀賞せん事を今より樂しんで居ります。

以上申述べました「マガレット」は何れの方も御承知の事とは存じますが、幼稚園で園藝をなさいますには至てたやすく栽培が出來まして、其上花時が長く繁殖もたやすく、花葉共にやさしき草花で御座います。私の長き年月の幼稚園園藝に付て苦心いたしました此一番栽培し易き草花につきて拙き筆を省みず申上ました。

ぬひとり

東京女子高等師範學校附屬幼稚園　新庄よし子

ぬひとりのきれが漸く見あたりましたからみな様にお知らせいたしませう。

目の荒いきれ地に毛糸でぬひとりすることをずつと前からいたしては居りましたが、みんな特殊なきれで御紹介することも出來ませんでした。その後して見たいけれ共きれがないので、といふ事を度々きゝましたのでどうにかしてよいきれを探しあてたいと思つてゐました處ズック（倚子の底を張るきれ）はどうかといふので、試して見ましたところ大層結果がよろしいので御紹介いたさうと存じます。

このぬひとりは太い糸で織つたごく目の荒い生地（主に麻の類）に幼兒が自分で描いた繪を普通の毛糸でぬひとりするのでございます。

（一）方法

まづ寫眞の第一についてお話し致します。

是はしきものにしてゐますが、かなり大きなきれでたて一米八センチ、よこ一米四十九センチ）ございますが是を幼兒の机の上にひろげて置き白墨で好きな様に繪を描かせます。一人づゝ向きも勝手に、是がぬひとりの下繪になるわけでこの時チャコを使つて見ましたが、白墨は手近にもあり、また是の方がたやすく繪をかく氣にもなれませう、ずつと白墨を使つて居ります。大きな繪や少しこ

み入つたのはぬつてゐる途中に消えさうになる事もあるので、いつも下繪がはつきりしてゐるやうにもう一度上をかゝせたり又先生がかいておく事もいたします。

下繪が出來ましたらその繪によつて好みの色の毛糸をとほした針を持たせます。大體下繪によつて色の決つて居るものもあります。例へば葉は綠チウリップの花は赤か黄かといふやうに。二つ三つ針の運び方を見せますと大低は出來ます。針の目は好きずきですが糸と糸との間がなるべくあかないやうに縫つた方が一つの繪がはつきり致します。幼年組でしたら先生がそばについて居て毛糸が短くなつた時、針から糸がぬけてしまつた時、こんがらかつた時、他の色の糸にうつる時、下繪が消えさうになつた時、糸がつれた時等は手傳はねばならないでせう。年長組は是等が一人で出來ませう。

昔して居りましたのはほんの指先ばかり動かすぬひとりでしたが、是は指先ばかりでは出來ません。ずつと肩からの大きい動きで運ばれて行くものですから、けれどもその運びは至つて遲々としたものですから仕上げを急ぎませんやうに、一つの繪を一人の子が一週間かゝる事もあります。十日かゝつても出來ない事もあります。幼兒の氣の向いた時、或は特に時間をきめてさせるにしても氣長に見てゐます。ですから一枚のテーブル掛なり、敷物なりが一年かゝることも二年かゝる事もございます。

この一枚のきれを中心にしてあつちからもこつちからも子供の手で引つ張り合つてぬひとりした結果は、繪の向きがまち〳〵であり、大きさも不同、色もとり〳〵である所に出來上つたものが誠におもしろみもあり幼兒の製作としてのふさはしさもあふれてゐるやうでございます。

在園中の幼兒めい〳〵の製作、例へば自由畫、ぬり繪、切紙、むしり紙、厚紙細工等殆んどまとめて持ち歸らせてゐますので、いつか描いた繪がたま〳〵殘つて居といふのを見る外は何もございい

ません。この殘して行つた一枚の敷物を見る度に在園中のその子のぬひとりしてゐたさま、それにつゞいてその子の幼稚園生活が思ひ浮ばれてなつかしさを覺えることがございます。

（二）材料

目のあらい生地

毛糸（太）

毛糸針（なるべくメドの大きいの）

白墨

澁

きれ地

目の荒いきれ地と申してもいろ〳〵種類がございますが最も是に理想的なのはマタイ（麻袋）といふ滿洲地方で產物を地方に送る時に用ふる袋のきれでございます。寫眞第二の地がマタイでございます。是はごく太い麻糸で織つたものですから織目が荒くドッシリした感じが致します。併し是はこちらでは容易に手に入りませんで、つてを求めて漸く手に入れるといふ有樣ですがやがて是もぬひとり材料としてまとめて取寄せることにもなりませう。この代用品とでも申しませうか、ズック（倚子の底張りをするきれ）を求めてして見ました。是ならばどの地方でも倚子をつくる店はありませうからこんな處で分けて貰ふことが出來ませう。手に入り易く且つ價もお安うございます。ねだんは一ヤール（三尺五寸）巾で二十八錢程でございますから一寸した壁掛のやうなものならきれだけが十五錢位で出來ます。

澁をぬること

右のきれをそのまゝすぐ用ひても勿論よろしいのですが、澁を塗つてみました。マタイにしてもズックにしても元々地が麻ですから、澁を塗りますと一體に地がピーンと張つてきて、皺がなくなり從つて針を通すのにきれのたるむといふ事がなく大變し易くなります。澁は、藥品店か塗料店で買ひまして（サイダー瓶に十錢位）右のきれに一面に塗ります。ネバ〳〵しませんかう幼兒に塗らせ

まして一寸陽にあてますとすぐ乾きます。どちらも地がうすい茶色ですから、澁を塗りますといくらか濃くなつてよい色にもなり、又きれの持ち工合が宜しくなります。一切刺繍用の枠などは用ひては居りません。

毛　糸

毛糸は別にとりたてゝ申す程の事でもなくどちらでもすぐ手に入りませう。普通「太」を使つて居ります。是はなるべく色の種類の澤山あるのが宜しく、色によりますとほんの僅かしか要りませんから一かせ(二オンス)づゝ買つて他の組と分けて使ひましたり又は使ひ殘りを利用いたしますほんの二三尺づゝでもやくに立つ事がございます。兎に角色のとり合せを面白いやうにするには種々の色の毛糸を集めておかねばなりません。出來上つたものを藏つておくわけでもございませんから、虫のつくこともございません。何か毛糸に代るよいものを探しても見ましたが高價であつたり、針のメドが通りにくかつたり、色がわるかつたりしましてどの點を考へても幼兒のぬひとりには毛糸にまさるものはないやうでございます。

針

毛糸針の中でも太くメドの大きいのを選びます始めは先生が糸を通しますが慣れるに從つて一人でいたしますから通しいゝやうに。毛糸針の先は丸くなつてゐますからあぶない事もございません

右は大體ぬひとりの方法と材料について一般に申しましたのですが、色紙を材料に入れて見ました。(寫眞第三)前のを純粹のぬひとりとするなら是はその應用とでも申しませうか。むしり紙(色紙にて自由に或る形を指先にてむしりたるもの)切紙(色紙を鋏にて切りたるもの)にて出來たものをズックなりマダイなりにのりではりつけます。是が少し乾いて紙がピッタリとついた後にそのふ

ちを前のぬひとりの方法で致します。色紙の色と同色の毛糸を使ひます。是はぬふべき下繪がいつ迄もはつきりして居りますから自分で書いた下繪をぬふよりは容易に出來るかとも思ひますが、純粹の糸の味はうすいやうでございます。この時の紙は普通のもざう紙の色紙が宜しく上等のいよまさ紙は針が通りにくうございます。寫眞第三の繪は椿、チウリップ、あやめ等のむしり紙を幼兒にして貰つていたしたので幼兒自身がいたした自由むしり紙か切紙でしたらもつとおもしろ味が出やうかと存じます。

寫眞の第二はマタイのきれで、手紙やらハガキやらその他書付など入れる袋をとりつけたもの。整理用、壁掛用兼ねてゐるものでございます。マタイを適宜の大きさに切り別に大小のきれを切つてこれにぬひとりをして、前のきれに、ぬひつけて袋としたものでございます。エプロンのポッケット式にしたので保育室なり茶の間なりにおいて重寶に使はれませう。

寫眞の第一は、敷物に使つて居ります。毛布などの毛のすり切れたのをきれいにいたして、ぬひますとおままゝ事のしきものによろしうございます

右はいづれも協同製作を主としたものですが年長組になれば各自一人づゝの物も出來ませう。

花瓶しき
ふくろ。大小いろ〳〵、繪本をいれる鞄樣のもの、お辨當いれ。
壁掛
お人形のひざかけ　等。

別に紙を材料にしてもみました。地は茶ボールとかダンボール（ボール紙の裏にダン〳〵のついゐるもの）とかゞ最も宜しく針も通し易く確りして居ります。紙テープでぬひとる事も出來ますがやはり毛糸を用ふる方が宜しいやうでございます。

早春の庭めぐり

及川ふみ

去年の秋もくれて初冬の風うすら寒い頃に倉橋先生から「もう今年は少しおそいけれども校内の落葉を幼兒に拾ひ集めさせると面白いでせう」とおつしやられた。

私はあゝおしい事だ今少し早く伺へばどんなにかいろいろの落葉も澤山にあつたであらう。いつか番町でも落葉をひろいあつめていらした樣に思ひ出された。燈臺もと暗しおそまきながらも拾ひあつめた。それでも集めて見れば前月號に新庄さんがかゝれた樣に割合に數多くあつた。それから思ひついて今年は校内の草木の芽をたづねめぐつて見やうと考へた。今年はお正月早々からの大雪で寒さが隨分はげしかつた。お庭の散歩によい日をまつてゐたがなか〳〵なかつた。一月十九日にやうやく、午後、庭へ數人の幼兒と出かけた。玄關前のバラが赤い可愛い芽を方々に數へたてられないほどつけてゐる。バラの外に芽の出てゐるものがあるか、さがして下さいと一緒に築山を一週する。枯れたやうなあぢさいの枝からも、うす綠の新芽が澤山に出てるのも見つけた。眞中にたつてゐる二本の山茶花の細い芽も見つけた。枯れた菊の根もとからも小さい澤山の若芽を見つけた。寒い〳〵とお部屋の中ですくんでゐる間にも草木はどん〳〵春の支度をしてゐたのだと思ひながら、女學校のお庭のにはとこの木を見につれていつた。芽が出てゐるともゐるとも、一寸五分位も青々とのびてゐた。この木は芽ぐむのが早いものとは知りながら幼兒をこゝへつれてきたのではあつたが、こんなにのびてゐやうとは思はなかつた。本校の方へもつと芽をさがしにゆこうと幼兒はい

つたがもうお歸りの時間になつたのでこの日はこれでやめた。

その後數日して又本校の庭へ芽を見つけにいつた。木の種類も多いので、この日は十數種の新芽を見つけた。

二月十日と十三日の大雪でしばらくの間は芽をたづねる事が出來なかつたが二月二十四日あたゝかなよい日であつた。自分は新入園兒保護者會の支度でゆかれなかつたので村上先生と本校の教生の方に又芽をたづねに連れていつていたゞいた。今日はすぐに幼兒は歸つてきた樣なけはひがした。今日は澤山見つかりましたかと村上先生にたづねると、芽を見つける前に霜ごけで道がわるくて歩けなくなつてすぐひきかへしました。一人一人の靴の泥をあらふに今までかゝりましたとおつしやつたのでほんとにすまなかつた。

三月二日、幼稚園の花壇に埋めていたゞいたチューリップの芽も五分位になつてゐた。幼兒と一つ二つと數へて見ると三十八ばかりも出てゐた。朝顏の竹垣の後へ蒔いてもらつたスウキトピーはどうなつたかと見ると、今年の烈しい寒さにまけたのか、やつと二三本、しかもまことにあはれな有樣であつた。藁でもかけて霜よけをしておけばよかつたのにと殘念に思つた。

これからは日增に暖く毎日の樣に庭に出で草花の手入れも出來る樣になる。つくしも出ればたんぽゝもある郊外の幼稚園がつく〴〵うらやましい

私はこうして時々庭へ幼兒と一緒に出て芽をたづねるのも、別に、芽の出た木の名を教へるのが本意であるのでもなければ、草の名を教へるのが本意でもない。四月五月になつて種々な花が美しくさいた時に幼兒がその花を大事に可愛がつてくれる樣にしたしませたいのである。數十の椿の蕾が一朝のうちに一つ殘らず綺麗に幼兒にもぎとられた時もあつた。あすにも開かん水蓮の花をぶつりと水がめの外へすてられた時もあつた。こんな悲しい事のない樣にいつもいつも幼兒がお庭の草木を可愛がつてくれる樣に親しませたいためである。

三月の手技材

目白幼稚園　和田實

三月の手技とは云ひながら三月中旬から四月中旬迄の材料ですのに、三月の卒業製作とも云ふ可きものに就ては前月號に既に述べてしまいました から、茲に述べる必要のあるものは四月の新學期始めの手技を如何にするかと云ふこと丈になりました。

四月始めの手技としては新入幼兒に手技手藝の面白さを感得せしめることが、誘導教育の主眼點でありますから、凡てが其積りで行はれねばなりません。單に、手技ばかりでなく、幼稚園に於ける凡てが、新入幼兒に面白く印象されることが必要でありますから、新入幼兒にさせる手技は成る可くやさしく美しきものを選び、古參の幼兒には新入幼兒に家づととして持たして歸すお土産を作らせると云ふ樣にして、一には新舊幼兒の融和を計ると共に此機會を利用して古參幼兒の手技を練習し、兼ねて新入幼兒に手技のやさしき技能であること、面白き作業であることを、先輩の實習で觀得する樣にさせることが必要であります。此意味で先づ新入幼兒にさせる手技の方から考へて見ると

折り紙。では山、蝶、鳥（蝶を少し變形したもの）

筋　紙。では輪つなぎ、輪つなぎの應用物。

豆細工。では彌次郎兵衛、團子等で成る可く、やさしく面白きものを工夫することです。以上は製作に屬するものですが、製作以外の手技即ち色板、積木、箸輪、粒體等も初步の子供には最も面白く遊べるでせう。

古參幼兒の製作としては、必ずしも一齊に一定せずとも、幼兒と相談しつゝ適宜、新入幼兒の興がりさうなものを選び、種々製作せしめることが出來るでせう。要するに四月中は主として新入兒を嬉しがらせることを主として、古參兒を激勵すると云ふ樣にしたならば幼兒の凡ての活動が生きて來ることだらうと思ひます。

手技手工以外に於ても此意味は相當重んぜらる可きでありませう。觀察、談話、唱歌、遊戲、等にも保育者の工夫あらんことを希望します。

『幸吉の旅』

東京女子高等師範學校教授　岡田みつ

（一〇）

お崎は、彌平爺さんが、馬車に馬をつける間、提灯を持つて、やり、又彌平が支度の途中で眠つてしまはないやうに見張つてゐやうと思つて、納屋へ出掛けていつた。ところが、爺さんは、いつになくテキパキと働いてゐた。そして、どことなく、その動作が、平常と變はつてゐた。時々惡寒でもするやうにブル〳〵體を慄はせたり、力が拔けて馬車の轅も支へられないやうな恰好をしたりした揚句に、馬の首ッ玉へぶら下つて、聲を出さずに笑ひこけてゐる風であつた。

「どうしたのさ、彌平さん。」とお崎が訊いた。「また、おきさりの黴が生えたやうな古洒落でも言はうつていふのだらう。洒落なんぞいつてる時ぢやないよ。一體どうしたんだよ。」

彌平は、一段と可笑しさがこみ上げて來たやうに、大きな口を、いやが上にも大きく開けて、

「あ、あ、もう我慢が出來ぬい。誰かに話さないと腹が割けちまふ！　まお崎さん、その箱にお掛け。ちよつぴり可笑しい話をして上げるから……だが、人に言つてはいけぬいせ、俺…知つてるんだ……あのう……逃げた奴さん……どこ

の邊にゐるかつてことを。」
「お前さんが、あの子を何處ぞへ隠したつていふの？そんな事をしてみたがいゝ。お前さんお鎌さんのうちには居られないよ。それだけは私が請け合つて置く。」
「なんの俺が隠すもんか。たゞね、奴さんがどこに隠れてゐるか、俺に大概分つてるつてことさ俺が思つてゐた通りになつてるから、それが可笑しくてこたへられねいんだ。實はなお崎さんおら五六日前にかう考へたんだよ。あの子供達を貰ひたがる人があつちにも、こつちにもあるやうにすると、あの子達に價値がつくだらうと思つてね。長老の岸田さんだの、お針のお千代さんなんぞを、うまく說き付けたんだ。するとそれが旨くいつてな……あの連中おらの手段に使はれてると知らねいもんで…お千代さんなんか舌る事にかけちやお手のものだからね、あの人は、口動かしてる方が默つてるよりは、どん權なにか樂なんだ。それからな、おら幸吉がいまに、逃げて行くだらうとこの四五日考へてゐたんだが、今日こそやるなと分つたんだ。何故つていふと、今日畫過ぎに、俺んとこへやつて來て……おら、あんまり暑いんで、ちいつとばかり休んでゐた。そこへやつて來て、消然た恰好してね、ま、訊く、訊く、いろんな事を訊くんだ。だが策略なんてものが、てんで無いんだから、あいつの腹ん中見通しなんだ。それで、こいつ逃げるんだなつて事が分つたんだ。だからその時に止めやうと思へば止められたんだ。けれどまた考へてみると、おらだつて養育院に行くのは嫌だからな、ェ、かまはねい、逃げたいんなら逃げるがいゝ、とおら思つたんだ。何故つていふと、逃げれば、中々しつかりした奴だつて事が分るし、邪魔がられるところに、へば

りついてるやうな人間ぢやねいつていふ事も分るんだもの。それにさ、お崎さんも俺もあいつの感心なのは、疾くに知つてるんで、まだ知らねいのは、お鎌さんばかりなんだ。ところが、そのお鎌さんといふ人は、牛みたいな人で、追ひまくつたんぢや駄目なんで、緩くりと賺し〳〵歩かせないぢやいけねいんだから、幸吉が逃げ出した方が、お鎌さんの氣を變へさせる事になるんかも知れないと思つてな。一體おら、ひとを瞞すことはしないが、これは瞞すんぢないもの。幸吉は自分の逃げ出す事を俺が知てると思つてゐないんだから、あいつも公明正大なのさ。あいつ俺に何も打明けねいんだから俺も公明正大なのさ。それからお鎌さんも、いざとなると立派な事をする人だから、それで差支ないし、お崎さんは、馬が目隱しをしたやうに、右も左も見ないで、正面むいてゐるんだから、これも差支なしだ。俺はだれの邪魔してるんでもないんだ。たゞ成行に任せて、將來がどうなるか傍で見物してゐるだけなんだ。そしてお鎌さんにしたいまゝをさせるつもりで、あの人が自分で處置をするやうな機會を俺が拵へてやつただけさ。だがなあ、俺いくら自分の好きなやうに企たんだつて幸吉のやうに上手にはとても出來ない。あの置いていつた手紙でもだ。おら、とてもあんなにや書けねい！　あいつのあの氣性はどうだい。犬を連れていつただけで、あとは何も言はねいで、たゞ丁寧にさよならと、言つただけぢやないか。……この上話してると遲くなつて間に合はねいかも知れない。さ、これから半田の森へ行つて、どんな樣子だか見て來よう。河治ひの路は、森ケ崎の方へ續いてゐるんだがつひ先刻、幸吉に、そつちの方へ行くと、干草を澤山作つてゐるつてことだの、ずつといつて

左手に薪にする木が積んである所を通り越すと、黒苺が路傍に澤山あることだの、それからその邊に、馬に被せる毛布が一枚置いてあるところがあるつて話してきかせたんだ。その毛布つていふのは、おら、一べん戸外で寢たときにそこへ置いて來たんだ。もつともそれは、つひ今日の五時ごろだつたんだから、今でもまだ、そこにあるだらうと思ふんだ。」

× × × × × × ×

彌平とお鎌さんは、半田の森の緣になつてゐる路を無言で馬車を驅つていつた。爺さんは幸吉をいくども半田の森へつれて來た事があるから、幸吉が、このあたりの村へでも行かうと思へば、この路を通りさうに思ふと、お鎌さんに話した。

お鎌といふ人は、生れて五十年間、いかなる夏にも冬にも、その心の中に優しい考が美しい行爲といふ花になつて咲き出てた、ためしがないのだつたが、柔かい幼な子の手に觸れられあどけない眼に見上げられて、彼女の女性としての優しさがはじめて目覺めたのであつた。

三四哩ほど進んだと思ふころに、遠くで、哀しげな聲が聞こえた。路傍に薪の大きな堆積のある邊へ來ると、ちいさな毛むくぢやらのものが、小高い山の上に立つて、雲もない空に、赤い球のやうに懸かつてゐる月に對つて盛に吠えてゐた。

「あれは、家に死ぬ人がある前兆だらう。」とお鎌は怖氣づいて彌平に尋ねた。彌平は、氣輕るに、「さう言ひますがね。もしさうなら、成程つていふ事がありますよ。今日、わしは、四疋白い子猫を池にはめて殺しましもの。丁度、その時あのポチの奴、傍にゐて見てゐたから、それで月に向つて吠えてるんでせう……もしあれがポチならね……どうもポチらしいな……やつはりポチだ。さうすると、幸吉は、きつとこの近くにゐ

ます。わし降りて、ちつと探して見ませう。」

「お前はそこにお出で。私が降りる。もしあの子が居たら、私は自分であの子に言ひたい事があるんだから。」

彌平が馬車を、柵のそばで止めると、ポチが跳んでやつて來た。ポチは、一目見るとすぐ馬のお玉だと悟つたのだつた。そして、お鎌さんの靴のそばへ來て「はてな、この靴の臭ひに記憶がある。二三度この臭ひのお見舞をうけた事がある。あ、さうだ。あのお鎌さんだ」とでも考へたのか、いきなりお鎌さんの膝に跳り上つて來たので、お鎌さんは、嫌だと思ひながらも、

「犬つてものが世間で言ふ程伶悧なものなら、この犬は幸吉のゐるところへ案内しさうなものだが。」といつた。

彌平は、用心深く、

「さあ、どうですか。ポチの中にはいろんな犬の性質が入つてゐるから、どの性質が出るか分らないなあ。犬もあんまり雜種になると、その本能もませませになつてしまふから、あんまり當にはなりませんが、でも、試めしてごらんなさい。じつとしていらつしやい。ポチがどうするか見てゐませう。」

お鎌は靜にしてゐた。ポチはお鎌の裾の邊にからみついた。

「さ、腰かけてごらんなさい。ポチはどうするか？」

お鎌は坐つた。するとポチはその膝に乘つてしまつた。

「こんだは、どこかへ行くふりをしてごらんなさい。すると先へ立つて、案内するかも知れません。」

お鎌はその通りにした。すると、ポチはあとから隨いていつた。

「こいつ間抜けだな。いや、待てよ。分つたぞ。こいつ見掛けほど間抜けでないかも知れない。幸吉は逃げて行きたいんで、見付けられて養育院に押込められたくないんだし、ポチだつてさうなんだから。あなたの氣持が分らないから、ポチの方だつて心持を見せませんよ。ポチ君の考は、どうもさうらしいな。」

ポチがまたお鎌の裾のところへ迫つてくるのでお鎌は身慄ひしながら、

「ポチや、かしこいね。幸吉のゐるところを敎へておくれ。そうしたらみんなでお家へ歸つて、御馳走上げようね。驅けていつて、お前の御主人探しておいで、良いワンワンだからね。」

ポチ推理の方法の分る人、またポチを愚物だとか賢いとか斷定しうる人は、餘程偉い哲學者に相違ない。とにかく、ポチはあらゆる方角を走り盡した揚句に、薪の山の周圍をグル〳〵廻り始めたので、お鎌も、そのあとについて行くと、鼠地の毛布の上に寢こけてゐる子供の姿が眼に入つた。蒼ざめたその顏は、月光を浴びて一層蒼白く見えた。その頰には涙のあとさへあつた。が、樂しい夢でも見てゐるのか、稍々開いた唇には、世にも美しい微笑が漂つてゐた。ポチはこつそり彌平のところへ戻つていつた。(こんな雜種の犬にも、遠慮といふものがあると見えて)お鎌は、眠つてゐる少年の傍に脆いて、

「幸吉や、幸吉や目をお覺まし。」といつたが、何の答もなかつた。

「幸吉や、目をお覺まし。小母さんがお迎に來たよ。」

幸吉は、迎へに來たときいて、ハツとして目を醒まして泣き出した。お鎌さんを見て、事の成行を悟つたのだつた。

「小母さん、おねがひです。院にやらずにおいて

下さい。どこか他處へやつて下さい。そこからは決して〳〵逃げ出しませんから。」

「まあ、この子は、小母さんは、うちへ連れて歸らうつていつて迎に來たのぢないか。」

あんまり話が結構すぎて、眞實とは思へなかつた。

「小母さんの家では、僕は邪魔なんです。」とためらひ〳〵幸吉はいつた。

「どの人も〳〵お前に歸つてもらひたい」と、いつてるんだよ。」と今まで誰もきいた事もない優しい聲でお鎌は答へた。「お崎小母さんも、菊ちやんも、お前を待つてゐるよ。彌平の小父さんは、馬車で、こゝに來てゐるよ。お前に歸つてもらひたいつてね。」

「だけど、あそこは小母さんの家で、小母さんは僕を邪魔なんでせう。」と、幸吉は口ごもつた。

「小母さんは、誰よりも一番お前に歸つてもらひたいんだよ。小母さんは、お前がゐなくては困るんだよ。」といひながら涙を流して「どうぞ勘忍してくれ。小母さんがわるかつたんで、お前が氣をわるくして逃げ出したんだ。勘忍して、うちへ來て、いつまでも〳〵小母さんの子になつておくれ。」

「ぢや小母さん！　僕たち二人とも小母さんに貰はれて、始終小母さんとこにゐて院へは決して行かないの。」

といつて、幸吉は、感謝のあまり、お鎌さんの首にしがみついた。

（一一）

「彌平さん！　もう七時になるのに、朝の仕事がまだ一つもしてないよ。知つてゐるの？」

彌平は欠伸をしながら、寢返りをして、お崎の聲をきいてゐた。折角の心地よい朝の眠りを邪魔するその聲は、爺さんの良心の聲よりも、余つ程

喧ましいのだつた。
「彌平さん！　オイ！　聞こえないの？」
「きこえないどころか。浦島だつて、さう間近で怒鳴られたら、目が覺めてしまふワ。」
「ぢや、起きるかい？」
「さう、やかましく言ふなら起きるよ。だが、かう出しぬけに起こさないでくれゝばいゝに。お日様が昇れば、自然におらだつて目を覺すに！さ、今、起きるぞ。」
「今、起きるぞ位で安心できるものか。起きて歩く音がするまで、こゝに居る。」
「今、すぐ、起きるつて云つてるのに！」
「お前さんの『今すぐに』は。それは長いんだから、一生の中に一度『今すぐに』をすると、命がおしまひになつてしまふ。」と言ひ捨てゝ、お崎は去つてしまつた。
加藤のうちの秋は美しかつた。果樹園では葡萄が紫色の房を垂らしてゐるし、熟した果物の匂ひが、あたたりに充ちてゐた。ピンクの「しもつけ草」は、石の塀のそばで、羽毛のやうな花瓣をちらつかせ、「あきのきりんさう」は、路傍に、豊かに咲き亂れてゐた。黄色い唐茄子は、庭の隅に山と積んであるし、稲の穂は重みに堪へかねてうつ向いてゐるし、豆は、黄色の莢から、今にもはぢけさうになつてゐた。
お崎は、お鎌さんと二人で、林檎の皮をむいてちいさく切りながら、
「どうしたんだか、この頃、私は元氣になつて、はしやぎたくてしかたがないんですよ。やつぱりあの子供達のせいでせうか。小母さん〳〵つて後を追つて來てね、私に手を曳かれて、やれ豚を見にゆかうの、雛鳥（ひよつこ）を見にゆかうのといつて行かなければ承知しないのですよ。ああ、それで思ひ出した。今朝、小學校の先生が通りかゝ

つたから、私走つていつて、幸吉が學校でどんな風だかきいて見たんです。さうしたら、先生がいふには、幸吉は、この邊で珍らしい子なんだつて。どんな本でも先生が讀ませると始めてゞなく、まるで、復習してゐるやうによく讀むのだつて。金曜日の午後の演習の時に、幸吉が暗記したお話をすると、あとの子供は、みんな口をあいて聞き入つて、中には、泣いたり笑つたりするのもあるんだつて。あの子の作つた文を見せてくれるつて言つてましたよ。」

× × × × × × ×

もう夕方になつてゐた。お鎌さんと彌平は、水曜日の夜の集まりに出掛けてしまつたので、お崎は、幸吉を連れて、買物に行かうと思つて、かれを探してゐた。　つひ三十分程まへに、お崎は、幸吉が書物をもち、菊孃は羽毛のやうに草の上を跳びながら、庭の方へゆくのを見かけたのだつた

お崎は、四阿の方へ行つてみた。すると、幸吉は居ないで、菊孃が、獨りで「お茶の會」をしてゐた。その樣子が、いかにも可愛いらしいので、お崎は、小蔭にひそんで立ちぎゝしてゐた。

まづ、卓の上に瀨戸物の片らだの貝殼などが、お皿の代りに、四人分並べてあつて、その中に林檎の小片と、生薑パンが盛つてあつた。二つ三つ人形が、御客として席についてゐた。その中に一つ首の無いのもあつた。菊ちやんは、別の一人を抱いてゐたが、それこそ病院で寢たきりになつてゐなければならない程の容態なのだつた。靴のボタンで出來てゐるその眼の片方は、麻糸の端からぶら下つてゐるし、その鼻は、やつと所在が分る位に摩り減らされてゐた。赤い毛糸の口は、糸がほどけて、黃色の毛糸の髮の毛は、安全ピンで留めてあり、横腹の孔から、臟腑が瞰いてゐた。ポチは、卓の上座に着いて、首無し人形の隣にゐた。

首無しさんの御馳走も自分がせしめる目論見らしいのであつた。菊嬢は、膝の上の破れ人形に對つて、

「あのネ、加藤のおかさちやん、いゝ事話して上げよう。今夜おとなにして、早くねんねするとネ、あしたいゝもの上げュよ。(一言一句に菊ちやんは、その人形を抱きしめるのだつた。)おまへちやん、くたびェた？　くたびェないワネ。まだ眠くないの？　そんなら、菊ちやん、いゝお話して上げュ。むかち〳〵、ちいちやな、鶏が居たとさ。十五、たまご生んだのよ。ちようちたらちよん中から、十一だか、十七だかちいちやな、ひよつこが出たの。ちようして、お鎌小母ちやんが、みんな育だての。いゝおはなちでちよ。」

聞いてゐたお崎は、何故とも知らず、涙が出てしかたがなかつた。默つてそこを立ち去つて、門のところまで來ると、丁度、果樹園から、幸吉が出て來たのに出會つた。この子は、時々思ひもよらない事を考へついて、お崎とお鎌を驚かせまた感心させるのであるが、その一つは、晴れた夕方に、果樹園に忍んでいつて、誰にも何ともいはないで、加藤のお政さんの墓へ、花束を飾つてくる事だつた。お鎌さんが、窓から見てゞも居ると、幸吉は、小母さんと僕とには、分つてゐるネ。だから何にもいふには及ばないや」とでも、いふ風に、穏かに微笑んで見せるのだつた。すると、お鎌さんは、以前のやうに、こんな事を心の奥に秘めて人には言はないのだが、更に更に、幸吉を可愛いく思ふのだつた。(終り)

歐米に於ける學校給食の現狀（承前）

——北米合衆國に於ける學校給食——

榮養研究所技師　原　徹一

B、ライラデルフイヤ市

1　歴　史　フイラデルフイヤ市は最も古き歴史を有し且つ最秀れたる給食法を講じて居る。

既に多年同市には「家庭と學校聯盟」(Home and School League なる機關が設けられ其の手で小學校の給食を行つて來た。此の給食方法は至極成績が良かつたので教育局の認むる處となり、一九一五年に單に小學校のみならず中等學校まで引き延ばした。以前は七校の小學校に過ぎなかつたのが此の擴張によつて小學校二五、中學校一六と云ふ風に一時に多數となり、而もそれ等が互に聯絡を取るに至つた。中等學校と小學校との聯合給食の利益は食品の材料の購入代金並調理に要する費用を著しく輕減する事が出來る處にある。此家庭學校聯盟に學校給食部を置き其の部長に學校給食に關する一切の事務並に會計に關する事項を掌らしめ、責務を負はしめる。市役所よりは何等此の事業の對して補助を與へない。人件費さへも支出しない。只最初設立に當つて必要なる器具や設備費を與ふるに過ぎない。それ故學校給食部は自持する事を要しそれのみならず部長初め、役員給料、器具又は設備の補足修繕もしなければならない。

そんな狀態であるからして此の事業は何等市に對して負擔せしめる處がない。中等學校給食は利益を生じ小學校給食は不足するが常であるので前の利益を後の不足に繰込んでバランスを取つて居る

2　小學校　小學校では最初より早晝食給食を行つた。學校では朝に休息時間が午前十時三十分から三十分間ある。此の時間に學校の兒童は附近小商人から不良なる食品やキャンデーを買ひそれが爲保健を害し品行を惡くするのが常であるので此の缺點を除く目的と、不良なる朝食をせし子供又は全然何等の食事を攝らざりし兒童に榮養ある溫き食品を給し其の榮養を改善する目的との二者の爲給食を開始したのである。從つて早晝食となり食品調理も簡單なものを選んだのである。大抵ミルク、コ、ア、クラツカー、チヨコレート、果實、オートミル、ジヤムサンドウイツチなどが供給せられる食品である。

3　中等學校　中等學校で給する食品は當局の言ふ處に依れば極めて榮養と衛生に注意を拂つて調理をしたものである。食堂には長き衛生食卓と廻轉椅子を備へてある。食前食後の皿の取扱ひは生徒自身がする。會計に金を拂ふ時に必ず汚れた皿を返す事になつて居る。生徒自身に此の仕事をなさしめるのは勞力を省く爲なるは云ふまでもない事であるが、此の爲生徒は清潔と云ふ事や整頓と云ふ事を自ら習得する事になつて大に利益がある。各中等學校には榮養手が居つてこれが献立作製並に事業監督の任に當る。

4　會計決算　給食部の會計には市教育局は何等の補助を與へないために自持する事が必要である。中等學校では多少の利益を得るを常とする、反對に小學校に於ては缺損を常とする。その上給食に用ふる設備器具などの修理に相當の金額を要する。此費用が極めて多額であつて其支出の爲に

給食經營に支障を來たさゞる限りは市教育局より何等の補助金を與へざるため破損修繕費も收支決算に加算せねばならぬ狀態に在り、徹頭徹尾自活自持する事が必要である。決算の一例として學校給食を大改革せし一九一九—二〇年の決算例を示して見る。本年度は修繕費として一〇四六七・二六弗を事業費より支出したゝめ二八七四・二二弗の缺損を來たした。之は前年度の繰越金の全部と多少の寄附金によつて漸く埋合せる事が出來たのであつた。

收入	
中等學校	三〇九六二七・六八弗
小學校	二九八〇六・七一
寄附金	三一・六四
雜收入	二九三・四〇
計	三三九七五九・四三
前年繰越金	六六〇四・九四
合計	三四六三六四・三七
支出	
給料及賃金	八六八九二・六二
食品(中等學校)	二一七一八五・一〇
同(小學校)	二三一七三・八一
洗濯其他の小支出	一九八五・〇〇
器具設備修繕費	一〇四六七・二六
其他	二六〇四・八二
計	三四二三〇八・六一
後期繰越	四〇五五・七六
合計	三四六三六四・三七

即ち右の表を見るに免に角自活自持して居る事がわかる。

C、シカゴ市

シカゴ市は元來米國に於て最も早くより凡での社會施設を備へた處で托兒所又は職業指導所など有名である。從つて學校給食も既に多年の經營經驗を有して居る。シカゴ市に於ける學校給食は教育局の任務に關するところである。それ故同局は全中等學校並六〇の小學校に給食を行つて居る日々三萬一千餘の小學兒童が給食を受けて居る。

食事は各學校で調理されて居る。紐育市の如く中央調理所を所有して居ない。其の理は單に運搬に不便だと云ふ點にあるのみである。食事は午前十時三十分又は正午である。食事献立は次の如きものである。

アダム小學校

月曜日　コヽア、サンドウイツチ、(ソーセージ、ジヤム、ピーナツトバター、バタリン)

火曜日　トマト、スパゲチスープ(肉入)、コヽア、サドンウイツチ

金曜日　コヽア、ピースープ、サンドウイツチ

クレー小學校

月曜日　ココア、クラツカー、チーズサンドウイツチ、アツプルバターサンドウイツチ

火曜日　ビーンスープ、温きフランクフルトサンドウイツチ、ピーナツツバタサンドウイツチ

水曜日　モロコシ又ハ米スープ、クラツカー、肉入サンドウイツチ、アツプルバターサンドウイツチ

木曜日　スパゲチスープ、牘肉サンドウイツチ、アツプルバターサンドウイツチ

金曜日　梅干、プドー及杏入スチユー、鮭サンドウイツチ、アツプルバター又はピーナツツバターサンドウイツチ

ドーア小學校

月曜日　スープ(肉入)、米又は麥プヂング、肉サンドウイツチ各二仙。パン(一片)及牛乳(四分一パインド)一仙

火曜日　肉(ソーセージ)サンドウイツチ、ゼリーパン牛乳とパン、パンとアツプルソース、何れも一仙

水曜日　ビーン、パン及牛乳、パン付梅シチユー、各一仙

木曜日　肉サンドウイチ、チヨコレートプヂング、パンと牛乳

金曜日　温きコヽア、パン牛乳、ゼリーパン、パイ

其他ヘール小學校なども之に類す。

各學校の献立の一品につき精細に價格、温量を計算して見ると

(1)　ホルテン小學校のコヽア

コヽア	一ポンド	價格	一・五弗
砂糖	一ポンド	五〇人前	
脱脂牛乳	四ガロン	一人前	六八カロリー
水	二ガロン	外にパン	六三カロリー

(2)　ワルシ小學校の壓搾オーツ及ミルク

壓搾オーツ	二ポンド	價格	七五仙
ミルク	四クオート	七〇人前	
砂糖	一ポンド	一人前九五カロリー	

(3)　ベル小學校のクリームドポテトー及ピー

ポテトー	三三ポンド	價格	一・八弗
ピー	二〇オンス罐三個	一八〇人前	
脱脂牛乳	二〇ポート	一〇〇〇カロリー	
粉バターリン	一ポンド半ポンド		

（4）フローベル小學校のパンプヂング

パン	四ポンド半	價格	六二仙
砂糖	四分三ポンド	六五人前	
脱脂乳	一クオート	一人前	一一六カロリー
干ブドウ	半箱		
卵	三個		
バニラ	テーブルスプン二杯		

前例並にマッシ、ヘーエ、フアレーン、ホルテン等の各小學校の献立精細表を見るに一品の價格は一仙内外で一人當り一〇〇—一九三カロリーである之と此の外に攝取するスープ、パン、デザートから攝取するカロリーとを合すれば一人前二五〇—三〇〇カロリーとなる。紐育又はブルックリンは一人前三五〇—四五〇であるからシカゴは之に比し甚だしく少い事になる。それ故價格を増してもつと多量を與へるとよいと云ふ意見が一般に行はれてゐる。スープは普通一仙であるが之を二倍にすると全體で丁度温量がよくなる。或はコンアには牛乳を今少し多く入れるとカロリー價が高くなる。さうすれば僅かの價格の増加で温量の増加は多大である。これ等が改良の具體案である。

斯様に何れの食品も一品では其の價格が一仙のものが多いので此の食事に一仙辨當 Penny Lunch と云ふ別稱がある。

市教育局は設備、器具、人件費を支出するから比較的經營は容易である。收支決算は毎年七萬弗位であつて自持する事が出來て居る。

D、其の他の都市

代表的のものとして前述した紐育、シカゴ、フイラデルフイヤの外他の都市に於ても殆んど其の多數は學校給食を實行して居る、其の經營方法、經濟の狀態に就ては各自に特徴を有し皆何れも相違して居る。例へばボストン市に於ては小學校は社會局の補助によつて各學校にて行ひ中等學校に

於ては科學及工業婦人聯盟の手によつて行つて居る。セントルイスは最初市の費用を以て給食を開始したのであつたが中途市民の反對する處となり今は有志者團體が之れに代つた。ロスアンゼルスに於ては學校の家庭經濟科の經營する處である。斯樣に其の經營方法は異るも學校給食の敎育的效果に就いては一致して之を認め其の發達に力めて居る。

八、虛弱兒童に對する特種給食

各種の原因による虛弱兒童は普通兒童と同一にせず、特種の學校を作り特種の給食を行つて居る。此の虛弱兒童としては貧血性、結核性、黴毒性、畸形、榮養不良などの兒童が區別せられて居る。之等の兒童は屋外學校(Outdoor school)に收容される。獨逸の項に於て既に記述せし如く同種のものは歐洲にもある。獨逸、英國にては學校にて全食物を給するのであるが米國に於ては普通家庭食の缺を補ふ程度である。以下に數例を擧げて見る事とする。

A、ロチエスター市

同市の特種給食は他都市と異り歐洲と同じく全食物を兒童に與ふるを特徵として居る。此の食物の中には兒童の生育と恢復に必要なる養素を含んで居ると言ふ事である。獻立の一例を左に示して見る。

朝、オートミール、砂糖、クリーム、ミルク

晝、(十一時) ミルク一杯、ローストビーフ、マッシポテト、コーン、パンとバター、ミルク、果物おやつ、ココアパン

一日當、蛋白質 五六・四 脂肪六四・一瓦 含水炭素 二九八・八瓦 〇・一四弗

學者が十歲臺の兒童に必要なりと推定せる量と此の量とを比較するに、

	標準としての推定量	屋外學校にて現在給與量
蛋白質	六〇	五六・四
脂肪	四〇	六四・一
含水炭素	二五〇	二九八・八

蛋白質が標準量より少く溫量が多過ぎる。

ロチエスターに於ける此の學校の現在の生徒數は三〇人で其の食品の調理は大抵他の學校の調理級（Cooking class）の女兒が調理する。勞力を省き經濟を圖るのと女兒の實習との兩得の爲である

B、シカゴ市

シカゴにも同樣屋外學校がある。主事シャーマン、キングスレー女史は語る。一日の一人當の費用は一一—一二仙カロリーは一一〇〇—一二〇〇である。學校食のみで無く勿論此の他家庭に於ても少量の食物を攝取するのが普通である。

朝、ココア、パン、ゼリー

晝、ビーフスチユー、馬鈴薯のボイル、パン、ミルク、プヂイング

シカゴでは此の生徒が五〇〇人ある。學校以外の家庭でも適食を與へしむるやうに指導を怠つて居ない。

C、紐育市

榮養不良兒又は虛弱兒の屋外學校のみならず畸形兒又は心臟疾患兒童の特別學校がある。食物は學校當局からミルク、クラツカー又は穀物を十時と二時半に給與する。そし晝食はブルツクリン學校給食委員の手で供給される。食物供給に要する費用は概ね慈善協會より給與されるので兒童はミルクとクラツカー代として一日二仙を支拂ふに過ぎない。或は全然支拂はざる時もある。學校で左のは、時間割によつて授業して居る。

九時—一〇時　學業
一〇時—一〇時一五分　特別給食
一〇時一五分—一一時　學業
一一時—一二時　休
一二時—一時　晝食
一時—二時四五分　學業
二時四五分—三時　おやつ

溫き食物を給する處では簡單なる調理所を必要とする故に之を設けて居る。食物の調理は教師が行ひ生徒はお手傳ひをする。一級の兒童數は二十

人と制限し之を一人の教師に擔任せしめる。

D、ルイスビール、(K. Y.)

屋外學校を設く。教育局學校給食部に於て朝の間食と正午辨當とを給する。熟練せる看護婦を家庭に派し家庭に於て適食を與ふる樣常に注意せしめる。學校給食の目的は家庭食の缺陷を補ふのに在るから親の協力なければ無意義となる。それ故特に此の主旨の徹底に力めて居る。

E、セントルイス市

此の町には屋外學校が二校ある。此の內一校は醫療を專門とする特種のものであつて恢復するまで此の學校に留め置くのである。食事は特に注意して與へて居る。一九二六年現在では一八人の兒童を收容して居る。他の學校は之と其の趣を異にし多數の兒童を收容する目的のもので適當なる晝食を與へ更に歸宅前に Snack (輕き辨當おやつ) を與へる。食物はスープ、穀物ミルクである。一日平均一〇二五カロリーを與へ、其の價は平均一七仙である。此の代價は勿論兒童より徵集するのであるが此の徵金丈では食物の代價全部を支拂ふ事が出來ない。一九一九年の會計を見るに費用は五千八百五十弗でぱ入は一一四三弗である、此の多額の不足はセントルイス結核協會の支出を仰いで居る。

募告

一、幼稚園及び小學校、家庭、育兒、看護等に關する論說調査研究等の寄稿を歡迎いたします。

一、寄稿は一行二十四字詰に記して下さい。但改行は一字下げること、また句讀點は一字あけること。

一、寄稿並に本誌の編輯に關する通信、紹介及び寄贈の新刊書、交換雜誌、入會手續、更に本誌の購讀及び廣告に關する通信並に照會等一切左記編輯兼發行所宛に願ひます。

東京女子高等師範學校附屬幼稚園內

日本幼稚園協會

注文規定

一、本誌御注文の方は凡て前金（郵稅共）で願ひます。（郵券代用の場合には總て一割增）

一、御送金の場合はなるべく振替貯金で振替口座東京一七二六六番日本幼稚園協會宛に願ひます。

一、送金の節には第何卷第何月號より第何月號迄と明記せられたし。

一、本誌の代金に對しては別に領收證を差出しません。特に御入用の方は往復はがきで御申越を願ひます。

一、會費切又は前金切の際にはその最終發送の雜誌の帶封に『前金切』の印章を押捺いたしますから其節は早速御送金を願ひます。

一、本誌の見本御入用の場合には前金參拾五錢發送を願ひます。

定價

一ヶ月分一冊	金參拾五錢	送料壹錢
半ヶ年分六冊	金貳圓拾錢	送料共
一ヶ年拾貳冊	金四圓貳拾錢	送料共

（外國行郵稅は一部金拾貳錢の割にて御拂込下さい）

昭和六年三月十二日印刷納本
昭和六年三月十五日發行
幼兒の教育　第三十一卷第三號

不許複製
禁轉載

編輯兼發行者　東京女子高等師範學校附屬幼稚園內　倉橋惣三

印刷者　東京市麴町區飯田町二丁目五十番地　須藤紋一

印刷所　東京市麴町區飯田町二丁目五十番地　京華社印刷所

發行所　東京女子高等師範學校附屬幼稚園內　日本幼稚園協會　振替口座東京一七二六六番

廣告

特等面一頁	金參拾圓	二等面一頁	金貳拾圓
一等面一頁	金貳拾五圓	一頁以下御斷	

神田區南甲賀町八番地奥松に御申込下さい。

東西幼年童話新選

梅の巻　櫻の巻　菊の巻　楓の巻

尋常一・二・三年程度

成城小學校導訓

奥野庄太郎先生著

兒童圖書館用書

折角子供の爲にかゝれたグリムやアンデルセンの童話等も其飜譯や飜案が難詰な爲結局大人の讀物となる事は誠に遺憾です童話は飽まで子供の知能、子供の情緒、子供の德性を培ふ源泉たる筈です。

本童話新選は徹頭徹尾、子供の爲に用意された讀物で、極く平易な文章と用字で、特に子供の讀物として適切な活字と紙方を研究し、たとひ其一字一句にも子供を對象としての親切さが滿ち溢れてゐます！小館は曩に世界著名の童話を紹介すべく學習室文庫を發刊し全國學校から多大の賞讃を得ましたが、本童話新選は右文庫中最も兒童に親炙せるもの數十篇宛を撰び、優雅な裝幀堅牢な美本として新に提供します。何卒各小學校、兒童圖書館並に一般家庭の御必備を希ひます。

各壹冊の定價と體裁

各卷 菊判全一冊宛	紙數五百頁宛
總クロース洋綴	各卷 挿畫四十宛
各卷	各卷 彩色畫四葉
	各卷 定價二圓宛
	各卷 送料廿七錢宛

東西兒童話新選

大地人文の巻

尋常四・五・六年程度

東京市天町牛込區四七

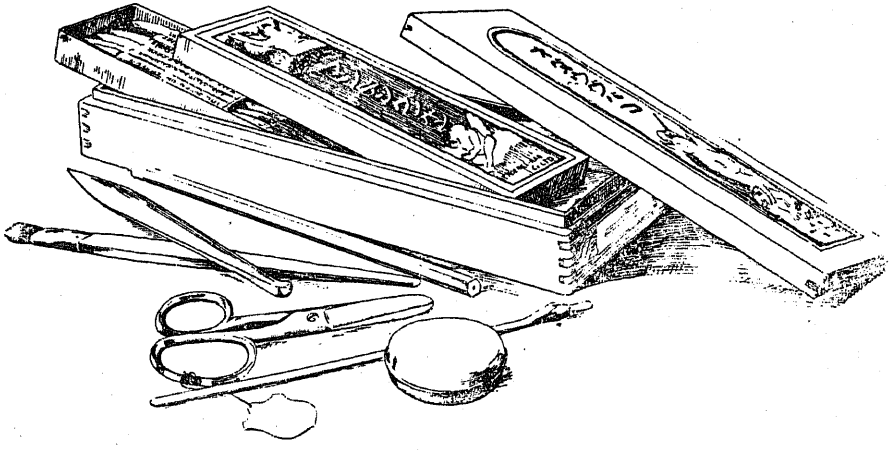
中文館書店

振替東京三八二四七番

昭和四年五月十五日第三種郵便物認可
（毎月一回十五日發行）
昭和六年三月十二日印刷納本
昭和六年三月十五日發行

東京女子高等師範學校附屬幼稚園御撰定

お道具箱



お道具箱とぬりゑの由來

倉橋惣三先生の談

「お道具箱」や「ぬりゑ」を、東京女高師附屬幼稚園で、使はせ初めたのは私であります（是等は入園の際に保護者に話して各自に買はせるのであります。）これについては凡そ左の三つの理由を擧げることが出來ます。

一、從來は普通これ等を幼稚園で、貸したり、與へたりしてゐたのでありますから、是等に要した費用を他の材料費に振り向けて、豐富に材料を提供する爲め。

材料を豐富に提供することは、保育上頗る必要なことで、實績の擧るや否やに大なる關係をもつものであります。

二、幼稚園で日常用ふるものに、自分のものと極つたものは殆どない。故に此等を唯一の自己所有物として、常に處理整頓せしむることは須要なる訓練の一つであります。

三、幼稚園終了の際はこれを家庭に持ち歸らしめ保育時代の記念品として保存することは、最も有意義なことであります。

右等の意味に於て私は常に、お道具箱や、ぬりゑ、並に自由畫帖を、各自に買はせる樣常に奬勵してゐるのであります。

（文責在筆者）

お道具箱一揃定價——金一圓

内容

お道具箱　一、金三十錢
クレオン十色太口　一、金二十五錢
洋鋏　一、金十五錢
毛針　一、金八錢
織刷　一、金十錢
粘土ベラ　一、金五錢
糊（容器付）　一、金五錢
黒鉛筆　一、金二錢
繪定規　一、金八錢

東京・神田・一橋通（教育會館内）
株式會社　フレーベル館
電話九段（御注文用）三八二七
三四八八・三六三七・三六三八
振替東京一九六四〇

定價三十五錢